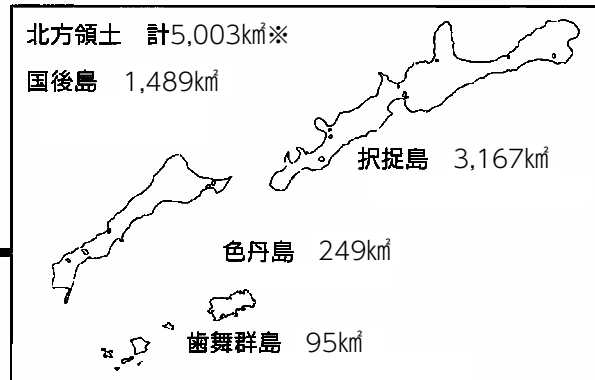


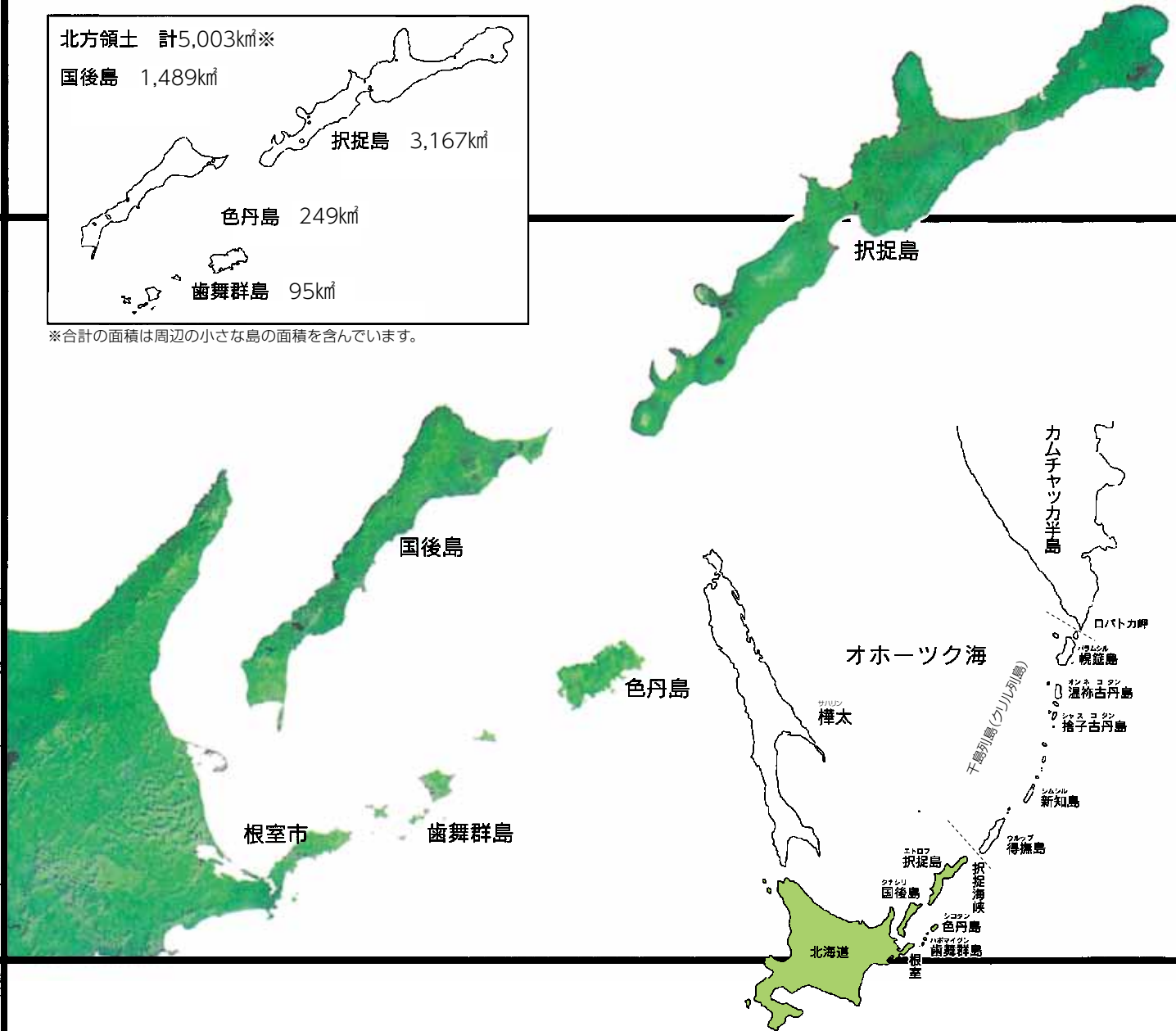
# 北方領土の早期返還を求めて

第26回「元島民の北方領土を語る会」集録

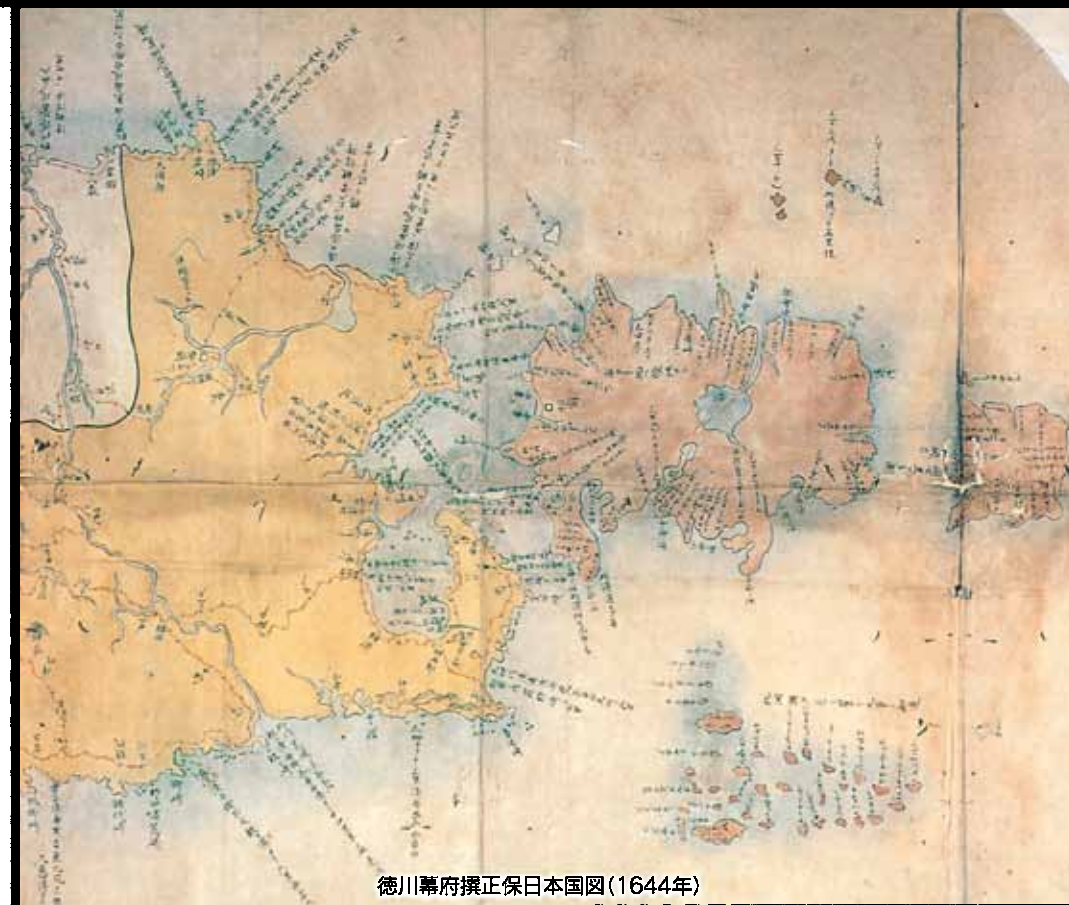
私たちが「北方領土」と呼ぶのは、  
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多摩島、志発島、  
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



※合計の面積は周辺の小さな島の面積を含んでいます。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)

『重ねる対話 つなげる熱意で 四島(しま)返還』

(平成27年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主 催 / 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

---

平成27年度  
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて  
第26回「元島民の北方領土を語る会」集録

---

発行／平成28年3月

編集／~~齋~~ 北方領土復帰期成同盟

〒060-0001

札幌市中央区北1条西3丁目3番地

札幌プラザビル3F

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

e-mail：[hoppou-d@isis.ocn.ne.jp](mailto:hoppou-d@isis.ocn.ne.jp)

印刷／株式会社 正文舎

---

# も く じ

1	平成27年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成27年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について	北方領土復帰期成同盟 4
	【島根県会場】	6
	○ 択捉島元島民	櫻井和子
	○ 志発島元島民二世	神林美砂
	【香川県会場】	14
	○ 志発島元島民	兎玉泰子
	○ 択捉島元島民二世	宝金まさみ
	【愛媛県会場】	25
	○ 水晶島元島民	吉田義久
	○ 国後島元島民二世	金田慎吾
	【佐賀県会場】	30
	○ 色丹島元島民	得能宏
	○ 志発島元島民二世	宮脇田鶴子

# 1 平成27年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

## 1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

終戦直後に不法に占拠されたまま戦後70年を迎える今日もなお、北方四島はロシアに実効支配されたままであり、故郷に帰る日を待っていた元島民も既に半数以上の方が亡くなっている。

これまで我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、解決への道筋は見えていない。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

## 2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

## 3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

## 4 開催時期

平成27年8月～平成27年12月

## 5 開催内容

### (1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

### (2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

## 2 平成27年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
8月8日(土) 島根県出雲市 出雲市連合婦人会	90	櫻井 和子 択捉島	昭和6年9月 択捉島留別村生まれ 昭和17年 函館に移住 昭和22年 家族が強制送還 平成13年 千島歯舞諸島居住者連盟功労賞受賞 平成24年 内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方担当)表彰受賞
		神林 美砂 志発島二世	職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ 昭和61年 東京たばこサービス(株)入社 平成11年 (有)ジンアドバタイジング設立
9月15日(火) 香川県高松市 香川県婦人団体 連絡協議会	80	児玉 泰子 志発島	職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和19年10月 志発島生まれ 昭和22年秋 強制送還 昭和52年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任 平成8年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 平成21年 現(公社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長
		宝金まさみ 択捉島二世	職 業 洋装店勤務 昭和39年 千葉県松戸市生まれ 昭和60年 アカデミー昌和入社
9月29日(火) 愛媛県宇和島市 宇和島市連合婦人会	40	吉田 義久 水晶島	職 業 行政書士、建築設計士 昭和12年8月 水晶島生まれ 昭和20年8月 終戦により本土へ引揚げ 昭和60年4月 千島歯舞諸島居住者連盟富山支部長に就任 昭和60年5月 千島歯舞諸島居住者連盟理事に就任 昭和60年6月 北方領土問題対策協会評議委員に就任
		金田 慎吾 国後島二世	職 業 税理士 昭和36年 札幌市生まれ 昭和59年 金田税理士事務所入所 平成11年 金田慎吾税理事務所開設
10月27日(火) 佐賀県地域 婦人連絡協議会	300	得能 宏 色丹島	職 業 自営業 昭和9年 色丹島生まれ 昭和22年 強制送還
		宮脇田鶴子 志発島二世	職 業 茶道・書道講師 昭和22年4月 中標津町生まれ 昭和46年4月 根室生産農業協同組合連合会勤務 平成20年3月 根室生産農業協同組合連合会退職

### 3 「元島民の北方領土を語る会」

#### 元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

## 北方領土返還要求運動について

### 北方領土復帰期成同盟

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で70年を迎えました。

北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領については容認したものの、北海道の北半分の占領は認めませんでした。

そのためソ連軍は、アメリカ軍の不在が確認された北方四島に兵力を集中し、昭和20年8月28日～9月5日までの間に北方四島の全ての島を占領しました。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長<sup>あんどういしすけ</sup>安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことが出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

もし北方四島がアメリカの占領下に入っていたら、沖縄と同じように返還されていたかもしれません。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

現在は各都道府県に、北方領土返還要求運動を推進する組織として、県民会議が設置されており、様々な運動を展開しております。

政府においては、これまで5度の日露首脳会談を重ねてきており、今度こそ平和条約の締結に向け前進すると期待をしていたところですが、昨今のウクライナ情勢や、様々な日露間での問題があり、未だ解決への道のりは厳しい現状です。

しかし、領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、外交交渉を続けてきております。戦後70年という節目の年に北方領土問題の解決という光が見えるのを元島民をはじめ日本国民全員が期待しているところであります。

元島民の平均年齢も80歳を超えました。元島民の方が、一人でも多くご存命のうちに、北方領土が返還され、自由に故郷へ帰れる事を願って止みません。

そのためにも、外交交渉の下支えとなる国民世論の結集、北方領土返還要求の大きな声が必要なのです。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて70年と長い時間が経ち、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者は高齢化しており、次代の返還要求運動を引き継ぐ後継者の育成が急務となっております。

北方同盟としては後継者の育成事業をこれまで以上に推進するとともに、返還要求運動を粘り強く展開し、北方領土問題を風化させぬよう努力して参ります。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

皆さんこんにちは。今日は宜しく申し上げます。北方領土は、北海道本島の東北の海に浮かぶ択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の4つの島々からなっております。北方領土は日本固有の領土で、元々あるもので後から与えられたものでもありません。

歴史的に見ましても1644年ですから今から370年ぐらい前に、日本で天保絵図という地図を作った時も、既に択捉島、国後島と証明しております。また、松前藩が北方領土の警備にあたり、早くから択捉島の岬に大日本択捉という標柱を立てて日本領土であるということを証明しております。

また1866年には日露通行条約という条約を結んで、択捉島から南は日本領土、択捉の隣ウルップ島から北はロシアの領土ということ条約ではっきりと決めております。

北方領土は動物類もたくさん住んでおりました。トドとかオットセイ、アザラシ、キタキツネ、エゾうさぎ、エゾテンとか、その他に鳥のエトピリカとかハヤブサ、ウ、白鳥、たくさんの鳥がおりました。また自然の資源が豊かなものでヒグマもたくさん住んでおりました。

北方領土には暖流と寒流がちょうど交差する、ぶつかっている地域なので水産資源も豊かで、世界三大漁業の一つ千島漁業としても非常に栄えておりました。また、水産物としては鮭、マスはもとより、蟹類、ウニ、ホタテ、昆布、ワカメ、海苔、非常にたくさんの物資があり、私は子供心にもここでは海苔を獲っても昆布を獲っても、何を獲っても一生生活出来るどころだと思いました。それに施設としまして、鯨も獲れましたし、私の村は捕鯨場がありましたから、捕鯨場や缶詰工場、また孵化場とか色んな施設がありましたから、遠く秋田、青森、函館からもたくさん出稼ぎの方が来て、当時村の人口の2倍3倍にも多くなった時がありました。

水産物、鮭、マスはもとより、タラ、ホタテたくさん獲れました。エビもたくさん獲れました。私は小学校5年生まで択捉島で生まれ過ごしていましたが、小学校5年生の時に島を離れて函館に参りました。小学校の思い出と言いますと、隣村の運動会には必ず友情出演というのか、4年生以上の生徒が15、6人、隣村は3里半ですけれど今の計算方法では14キロもあったんです。そこへ必ず皆でお弁当を持ってリュックを背負って、3時間余りもテクテク歩いて参加したものです。途中熊が出るので、父兄の人たちが馬に乗って、熊避けのラッパを吹いて守ってくれました。その中に父の姿を見て非常に嬉しく思いました。

小学校は教室が1つしかなくて、校長先生兼用務員さんという感じで、机の並べ方で学年が決められて、右を見て1年生、左を見て2年生という感じで1日に1時間しか授業は受けられませんでした。その時、将来先生の資格を取って必ず島に帰って先生のお手伝いをしようと心に誓って5年生で出てきましたが、ついにその夢は叶えられませんでした。

また皆で釣りもしました。ただ海が寒流のために泳げないので、沼や川でも泳ぎました。また、村の真ん中に棧橋があって、その棧橋を渡っては釣りもしました。アブラコがよく釣れました。赤、緑、黄色、茶色のような色がはっきりとしたアブラコがたくさん釣れました。また学校の周りには松の木があって、その松の実が普通見る松かさよりも、ひとつの大きさが10センチぐらいもあって、そのかさを手繰ってお米の2倍ぐらいの大きさの松の実を、よく皆で休み時間に取って食べました。



また捕鯨場もありましたから、捕鯨船が汽笛を3回鳴らすと鯨が獲れた印なんです。その音を聞いて、みんな解剖を見に15分ぐらいの道のりを急ぎ足で解剖を見に行きました。大きな鯨が、鉄のワイヤーのようなので尻尾を縛られて解剖場に上がってくるんですけど、ちょうど薙刀のような長い先に50センチぐらいの刃渡りの包丁のような長いのを持ってすぐ解剖が始まるんです。するとおじさんが、必ず解剖している方が、白身のすぐ下のすのこって私たちは言ったんですけど、霜降りのところを20センチ角に切って、持って行って食べれっていう感じでいつもくれました。夜でも夜中でも、鯨が獲れると解剖が始まるので、夜などは白い脂、白身のところを松明のように入れ物に放り投げて、バリバリバリバリって音を立てて松明のように火の粉が上がり、その明かりで解剖する人の手元を照らしておりました。電気もなくガスもなく水道もない、今の方から見るとなんと不自由だと思いでしょと思いますが、村の人たちは何の不自由も感じないで仲良く楽しい生活をしておりました。

それが1940年日本は世界を相手に戦争を始めてしまい、第二次世界大戦となりました。その約1か月前なんですけれど、12月8日が戦争勃発の日ですけど、11月だと思いますが、朝起きると私の家の前が単冠湾結構深かったと思うんです。5隻6隻と、朝起きるたびに軍艦がとまって、40ぐらいはいたと思うんですけど、すごく大きい航空母艦などは少し沖の方にとまって、港いっぱい軍艦になりました。そして村の人たちには、軍艦を見てはいけないとかそういうお触れが出たんですけど、望遠鏡で窓からこっそりと見ていました。

日本の海軍さんは、昔セーラー服で帽子のリボンをなびかせて、船の後ろの方の欄干のところ、船と船の手旗信号という信号をしておりました。夜は夜でサーチライトというんでしょうか、空に向かってなんせ軍艦から青白い閃光を空にはなって、不夜城のように明るく、ランプの生活しかしていない私たちはびっくりして眺めておりました。後からの話ですが、そこから真珠湾に向かったそうです。

戦争も初めのうちは戦果を挙げて、シンガポール陥落とかそういうニュースを聞くたびに、私たちは提灯行列などをしてお祝いしたものです。日本もだんだん敗戦の色が濃くなって、ついに広島、長崎に原子爆弾を落とされてとうとう終戦になりましたけれど、その終戦の日のわずか6日前にロシアが急に参戦しました。それはおそらく、原子爆弾があんなに落とされて、日本にはもう勝ち目がないと思ってからの手段だと思います。わずか6日前に参戦して、急に島を全部取ってしまいました。それが今の北方領土なので、はじめ私は、5年生から函館に出ておりましたから、その終戦当時の様子の島のごことはわからないんですけど、両親や兄弟やみんなから話を聞きました。終戦が8月15日で、25日から8日にかけて進駐軍が入ってきたんですけど、日本はアメリカと戦争したからアメリカの兵隊だとみんな思っていたらしいんですけど、銃は突きつけているんですが服も破けているし、靴もぼろぼろという感じの兵隊さんたちだったので、みんなびっくりしたみたいです。まさかロシア兵とは思わなかったみたいです。

私の家も、郵便局とか駅通って昔の名前ですが旅館をやっていたので、郵便局に一番先に来て、通信施設を全部破壊されたようです。それから旅館の方には土足で銃を突きつけて上がってきて、私の祖父母や両親兄弟もみんな前の小屋、物置小屋に入れられたようです。それからそこでみんな1年8か月も頑張って暮らしてきました。

ロシアの人たちは日本の着物がすごく好きだそうで、着物と物々交換でパンとか野菜を交換して食べていたようです。私の祖父は明治26年から釧路の警備隊を経て、若い時に島に渡り、それから50年余りを厳しい環境の中で開拓に従事してきたのですが、駅通から駅通は全て交通機関は馬なので、馬も50頭ほどいたんですけど、それも全部ロシアに取られてしまいました。

終戦後まもなく、私が生まれた択捉島にも、暁部隊という軍隊が入っておりまして、どこかへ連れて行かれるような感じだからと言って、みんなもし内地へ帰ったらなんとか届けてくれということで、私の両親のところには写真とか手紙とかをみんな持ってきたそうです。引き揚げる時も急に船に乗れという感じで、少しでも物を置いていくように考えていたみたいで、私の母は今ではステンボトルがあるのでちょっとわからない方も多いと思うんですけど、昔は魔法瓶と言ってガラスで出来ていて、それを守るために周りに1センチ以上の空間があるんです。そこに預かった手紙や写真などをびっちり詰め込んで、見つからないように持ってこれました。

引き揚げる時、馬も取られ全てを取られた祖父がリュック1つで帰ってきましたから、どんなにか無念だったと思います。私もひとりで函館にいたものですから、7月14、15と函館空襲がありました。それに対して、島の父から変わりはないとか無事かという電報が来て、私も元気であることを伝えようと思って、本局に電報を打ちに行っても海外向けはダメだということで、全然こちらから通信することができず、私の両親も元気であるかと思いながら、私の影膳を据えていてくれたみたいです。

そして船で沖の船に向かっているときに、私がいた時からいたクロという犬がおりました。あれは駅通の犬だとみんなが言って見たら、クロがそのはしけの後ろを泳いで追いかけてきたみたいです。声を出してクロって言ったらどこまでも来るので、両親も兄弟も我慢して、ただ無事に帰ってくれと祈っていたみたいです。みんな引きあげたんですけれど、ちょうど函館にシベリアの引き揚げがあったものですから、父がシベリアに連れて行かれて、そして帰ってきたんだと、白竜丸からの父からの元気で函館に着いたっていうのを見てそう思っていたんですけれど、父が最初に進駐軍に調べられたときに、私が女学校にいるはずだけど、それが一番気になると言ったみたいで、進駐軍が学校まで来ました。

私たちは、学校に通うのも進駐軍の駐屯地の前を通らないように目と目を合わせないようにとか厳しく言われていたんですけれど、進駐軍が2人学校に来てみんなびっくりしたようでした。でも私が元気で在籍しているということを確認して帰ったそうなんです。私も殺されるかもしれないと思いながら駐屯地に訪ねていきました。そしたら両親もおじいさんおばあさん、兄弟もみんな元気で来たよということを知ってびっくりしました。嬉しくて、もう1人じゃないんだと思ったらあんな嬉しいことはなかったです。何しろ引き揚げるときは1万7千人もいた人口が、もう1万人以上も亡くなってしまい、残された人ももう80歳以上になっているので心細い感じがします。

今まで、エリツインとかゴルバチョフとかロシアからも大統領が日本を訪れ、日本からも小渕首相とか森首相、橋本首相などロシアを訪問して、その度に領土返還問題を出すんですけれど、一向に進展せずに現在に至っております。またメドヴェージェフ首相も北方領土に行き融資するからとか資力を出すとかいうことで、だんだんまた返還運動は遠のいていきます。

政府としましても予算とか、また今北方領土に住んでいる人との交流を考えて、ビザなし訪問とか自由訪問とか色々政府としてもやってくれております。私も3歳で弟を亡くしているので、第1回の墓参には私の村の時に行ってきました。もう墓石などは一切ないんです。ロシアの方のお墓は十字架のような簡単なお墓なので、日本のお墓が珍しいみたいで、パン焼き窯に使ったり、家の土台にしたりとか石碑はひとつも残っておりませんでした。だいたいこの辺りだということで、国で慰霊祭をしてもらいました。そして住んでいた村の方をちょっと回ってくれてお墓の前を通った時に、小さな茶色い犬がキャンキャン鳴いてバスの後を追いかけてきました。

私1人なら幻かと思うんですけど、その時妹もいまして2人とも見えていますし、あれは弟の化身かなと、いっぺんも私の生まれた村は家がないので、そんなことは考えられないんですけど、犬が追いかけてきました。弟も帰りたいのかなと思ってきました。

何しろ私たちの生き残っているものも、本当に80歳以上になって少ないので、私たちの力だけでは返還運動は大変なことなのです。これからは2世、3世の方にも力になってもらって、まず皆さんには関心を持っていただくこと。署名活動があったら必ず参加してください。私も残り少ない人生ですけど、返還運動に携わって頑張っていきますので、皆さんもよろしく協力をしてください。これでお話を終わります。

おはようございます。只今ご紹介いただきました神林美砂と申します。日頃より、北方領土返還要求運動にご理解とご尽力いただいていることに敬意を表します。

本日ここ島根・出雲でお話する機会をいただきましたので、始めに少しだけ関連のあるお話しをしたいと思えます。

こちらに来たのは初めてなのですが、島根県ですぐに思い浮かぶのは、出雲大社、大山、石見銀山、松江城などで自然と歴史、神話・神様です。また玉造温泉も有名ですね。国後島、択捉島は火山が連なっていて活火山も多く、温泉も昔からたくさんあります。戦前国後島では、吹き出る硫黄を木材に燻して腐食を防ぐ加工をして荷出していたそうです。温泉は今も変わらず湧き出っていて、川の水で温度調節するような自然そのままのものもありますが、近年では施設が整備され、現在住んでいるロシア人も水着を着て温泉を楽しんでいます。また、エネルギーとしても活用していて国後島、択捉島では火山の地熱を利用し発電して電力を賄っています。

あとは何と言っても食べ物で宍道湖のしじみ、日本海の新鮮な魚などです。昨日もお寿司をとっても美味しくいただきました。

もうひとつ大切なこと、竹島問題です。皆さんも私たちと同じくイライラ・モヤモヤを抱えて運動されていることと思えます。日本固有の領土でありながら、他国に不法占拠され、政府間の交渉が遅々として進まない。北方領土問題も同じ状況です。私たちにできることは声をあげ続けることと、このような場を通じ知ってもらうことだと思えます。

私は、根室で生まれ根室で育ちました。母は歯舞群島・志発島の出身です。子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には大きくて怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり地理的なこと、歴史、戦前の暮らしぶりなどを学びました。

私は数年前から「元島民二世の語り部」の活動をしています。現実問題として私のような二世が活動していかなければならなくなってきました。

今年は戦後70年の節目の年です。北方領土が占領された時10歳だった方も80歳。後で島を訪問した時の話でも触れますが、年々一世の方の訪問も少なくなり現場で当時のお話を聞ける機会も減りました。「記憶と島への想いを引き継いでいく」という二世の役割も困難になってきています。先程の櫻井さんのようにお話しできる方も少なくなりました。

返還運動に関わってから20年以上が経ちました。その間様々な機会を与えられました。本日は私が見聞きしてきたことをお話ししてまいります。

初めに北方四島の概要についてお話します。国後島は沖縄本島より少し大きく、択捉島はその約2倍、この二島で四島の93%の面積を占めています。この二島は山々が連なり、多くの川が流れ雄大な大自然の島です。国後島の爺爺岳は、四島最高峰の美しい山です。島の北東・択捉島側にあります。先程も火山のお話しをしましたが、私が小学6年生の時に大噴火し、根室にも真っ黒な火山灰が降り傘を差して学校に行きました。択捉島の太平洋側には、真珠湾攻撃に向かう連合艦隊が集結した単冠湾。隣町の具谷では、夜とても明るいので大きな火事起きたのかと思うほどだったそうです。そしてオホーツク海側には昭和20年8月28日、ソ連軍が四島で一番初めに上陸してきた留別があります。

色丹島はなだらかな丘が続く緑の美しい島。アナマ湾は深く切れ込んだ良港で、昔も今も嵐の時の船の避難港です。歯舞群島は起伏が少なく、私たちはせんべい島なんて言っていますが、主な五島（水晶・秋勇留・勇留・志発・多楽）の周辺には海鳥や海獣類の多く生息する大小様々な岩礁があります。

終戦時四島には17,291人が住んでおりました。漁期には多くの出稼ぎの人も居たそうです。島民は海からの豊かな恩恵を受け暮らしていました。当時は冷凍技術がありませんから、獲れた魚介類・海藻類は塩蔵や乾燥、缶詰に加工していました。皆さんおなじみの昆布はとても良質なものでした。今もですよ。志発島では昆布と並んで乾燥帆立貝柱もたくさん作っていました。学校帰りに、干してある貝柱をポケットいっぱい詰めて、食べながら帰ったそうです。ここに志発島から私が持ち帰った貝殻があります。ごく膨らんだ貝殻ですが貝柱がとても大きかったです。

昭和の初め択捉島・紗那では豊漁が続き、景気が良く豊の下にお札が敷いてあったという話も聞きましたし、三越の通販で買い物をしていたそうです。噴水やテニスコートのある家もありました。またカニ缶の酸化防止の白い紙は、国後島の缶詰工場が始まりと言われていました。歯舞群島と国後島は、主に根室の経済圏で、物資は根室から入っていたそうです。択捉島には函館からの船が入っていました。先程お話しした単冠湾は冬でも結氷しなかったので1年中物資や郵便が途絶えなかったそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先ほどの温泉の話もそうですが、雄大な自然です。解りやすくいうと、知床が何十もある感じです。山・川・森・高山植物・滝・湖・湿原・温泉、そこにはクマ・海鳥・シャチ・鯨・ラッコなどの生き物が生息しています。

現在もロシア人居住地区を除き、ほとんどが手付かずの大自然です。近年ロシアの国家予算などがつき、開発や整備が急ピッチで進んでおり、資源の乱獲でこれらは壊されつつあります。こういった環境面からも、返還を急がなければならないのです。

私は、ビザなし交流の始まった年に島に行く機会を得ました。先ほどお話ししたような子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。「とにかく行って見てみよう」と思ったのです。

初めて見た国後島・古釜布。霧の中、湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島を、なぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」で歌われている「遙かくなしり」なのか…。錆色の景色を見て一番初めに感じたことです。択捉も色丹も同じでした。

しかし天気良くなると、青い空、あふれる緑、素晴らしい自然が目飛び込んできました。ロシア人も明るく、子供の頃から持っていたイメージを捨てるのにはそれほど時間は掛かりませんでした。

この初めての訪問で、私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。私たちは運悪く嵐に遭い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこはおじいさんの故郷、内保村の沖合でした。嵐に遭わなければ目にもすることもなく、夜中に航行するはずの場所でした。

大きく揺れる船で、島のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。色々思い出していたのでしょう。

天候が回復し、夜中に船は碇を上げました。その際、漁師だったおじいさんが「あの山（アトサ岳）の雲が取れば風向きが変わる。そうしたらGOだ。」と船長さんにアドバイスしたそうです。おじいさんは真っ暗で揺れるデッキに出て、島に眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。私はおじいさんに言われました。「ねねこ～（おねえちゃん）、オレはもう島に来れな

い。後は頼むぞ。」「そんなことないよ、また来られるから。」と返しましたが、胸が一杯になりました。鮭は生まれた川に戻ってきます。「サケになってでも帰りたい。」と書いていたのですが、叶うことなく亡くなられました。

私はこれまでに3回志発島の元居住地に行きました。2007年、2011年、そして昨年8月です。初めての時は同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ。」と教えて頂いたり、初対面の方から亡くなった叔父や叔母の話を聞きました。

先程ホタテの貝殻をお見せしましたが、他にもあります。生活していた証しのお茶碗のカケラ、石炭もあります。海底に鉱脈があって波で削られて打ちあげられているらしいのですが、戦前も集めて燃料にしていたそうです。石炭拾いは子供の仕事で、その頃に戻ったように皆さん集めていました。それと「多楽石」と元島民が呼ぶ石、メノウの一種だと思うのですが・・・これは本当に波打ち際で一際輝いて見えて、みんなでジャブジャブ水際を下ばかり見て必死に探しました。

占領された1945年9月には、母の家族は親戚を頼り疎開し島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて、ソ連兵が島の反対側に行っている間にその船で女・子供だけでも根室に逃がそう。ということになり、地区の人たちが乗りきれないほど集まったのでさらに小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後初めての多勢の引き揚げということで、島の様子を知りたい役所や多くのマスコミが船を迎えたそうです。その船に乗っていた一家の末の妹さんが私に言いました。「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったかもしれないよ。」と。

2011年6月、再び志発島に行ってきました。元居住地の再確認と、出来るだけ一世の方のお話しを現地で聞こうと思っていました。3月の地震の津波で、砂浜にはちぎられた海藻が高く積もり、浜辺に壁が出来たようになってずいぶん様子が変わっていました。前回確認したはずの家の場所も、この辺り・・・というのは判ったのですが、頼りだった近所の姉妹（お二人とも80歳を超えています）が体調を崩し参加出来なくなったこともあり、再確認をできずに戻ってきました。

こんな状況だったのは私だけではなかったもので、一緒に参加した同じ世代の人と、お互いの家の場所をみんなで確認しましたが、元島民の平均年齢は70代後半。高齢化が進み、記憶の引き継ぎが難しくなっていることを実感しました。

昨年の訪問は、従弟と参加しました。同じ地区の80歳を超えた一世の女性も三人いてお話を聞くことができました。私のお爺さんの船で根室に逃げてきた方々です。

現在志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期の時にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々はただただ島を見えています。私たちには見えない昔の景色や、家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切なくなります。私はできる限り現地で元島民のお話を聞くようにしています。島への想いをより強く感じるからです。

みなさんもそうだと思うのですが、故郷というのは年を取れば取るほど懐かしく、恋しくなるものですね。年を取って、自分の生きてきた月日を振り返ったり、懐かしんだりすると必ず故郷を思い出します。自分たちの意志ではなく出てきたままで、自由に行けないとなればなおさらです。

四島からの引き揚げ方は様々です。歯舞群島の島々や、国後島の北海道に近い地域などからは、嵐の夜やソ連軍の見張りが手薄になった時などに、根室目指して小舟で逃げてきた人も少なくありません。命を失った人もいます。若い女性は「ソ連兵に見つかったら乱暴されるかもしれない」と、服の襟に毒を練り込んだ団子を忍ばせていたそうです。また、送りこまれてきたソ連人と共

に暮らし、寒い時期に劣悪の環境の引揚げ船で樺太経由で函館に送られた人。なかには村を出て、函館に着くまで3ヶ月かかった人。家の子供が皆小柄なのは、引き揚げ時とその後の栄養が足りなかったと言う人。病気になったり、定住地がなかなか決まらず引き揚げ後も大変苦労されたそうです。櫻井さんのように情報は何もなく、不安な日々を送り待っていた方もいました。

東日本大震災の後、岩手県に住む国後島出身の方にお見舞いのハガキを書きました。その方は、内陸にお住まいなので大きな被害には遭われていませんでしたが、後でお手紙をいただきましたのでその一節をご紹介します。

「特に、福島原発周辺の被災者の避難所生活を思う時、住み慣れた国後島を追われ、樺太の真岡の収容所で家族8人とともに過ごした日々を思い出します。」というお手紙です。自らの意志ではなく故郷を離れ、先がどうなるのか判らないということが引揚げの時の自分たちとダブったのでしょうか。同じようなことを他の元島民の方もおっしゃっていました。

四島を返せと言うが、日本人は今更この便利とは言えない島に住めるのか？と聞くロシア人もいます。そういう理屈ではないのです。故郷だから帰りたい。ただそれだけで当たり前のことなのです。

私たち2世や3世は「後継者」と呼ばれています。文字では「後を継ぐ者」と書きますが、元島民の後継者として何を継ぐのか？と考えます。70年進展のないことの後を継ぐ。とても重いものです。

北方領土は4つの島で「北方領土」であるということ、今日お話をさせていただいた「島への想い」をしっかり継ぎ返還運動をしていくこと、それが後継者の役目です。それぞれの元島民が抱えている「島への想い」を聞き伝え感じ、一日も早い解決を目指し力にして行きたいと考えています。

竹島の問題もそうですが、日露間も首脳会談も行っていない状況です。近年は、二国間だけの問題ではなくウクライナ情勢など様々なことが絡んで来ています。双方の問題が解決することを願い、頑張ってまいりましょう。本日は本当にありがとうございました。

ご紹介いただきました児玉泰子です。私は、北方領土に3歳まで住んでおりました。島の事は殆ど記憶にありませんが、島で生まれましたので元島民です。

それでは初めに、北方領土の島々についてお話しさせていただきます。時々皆さんに質問をいたしますので宜しくお願い致します。

北方四島では、海藻類の昆布や海苔・鮭・鱒・干鰯・ホタテの缶詰や干し貝柱・蟹の缶詰・クジラ・その他、小型の魚種等を採取、加工しておりました。

それでは四島に関して簡単にお話しいたします。北方領土は、歯舞・色丹・国後・択捉と呼ばれておりますが、では「歯舞と言う島があると思いの方は手を挙げて下さい」。よく御存じですね、歯舞という名の島は無いのです。正式には歯舞群島と言います。群島の個々の島にはそれぞれ名前が付いております。お手元のパンフレット「北方四島の地図名」をご覧頂くと解ります。では、なぜ歯舞と言われているかお話し致します。

北海道の根室から納沙布岬へ行く途中16kmの所に歯舞村の本村が在りました。根室半島の先に連なる群島は歯舞村の行政区域で歯舞村の一部でした。戦後、群島が占拠され離島と本村が寸断されたのです。戦後、歯舞村は根室町と合併致しましたので、現在は根室市の一部です。

歯舞群島の戦前の主な生産品は、昆布やホタテなどでした。色丹島の主な生産物はクジラで、その他干鰯・海藻類。国後島は蟹缶や昆布、その他の海藻類。択捉島は鮭鱒の塩蔵と海藻類でした。

それでは、個々の島々に関してもう少しお話致します。質問致します。「国後島と沖縄本島どちらが大きいでしょうか？」国後島の方が少し大きいのです。そして択捉島は、国後島の2倍あります。日本列島としては、本州、北海道、九州、四国に次いで大きいのが、択捉島、次いで、国後島、沖縄本島となります。北海道が大きいので、そんなに大きいとは思いません。それは、日頃私たちが目にする日本列島地図は、沖縄と北方領土が別枠に書かれているからかも知れません。

四島は別々の顔を持っております。歯舞群島は、何れの島も起伏がなく平坦で一面草原に覆われています。島々の周辺の海は岩礁が多いです。質問致します。「岩礁が多いと何が育つでしょうか。婦人団体の方々とはとっても縁の深い物です。」良質の昆布が育つのです。質問です。「昆布が繁茂している所に生息する海獣は何でしょうか？」水族館で大変人気の愛らしい動物です。そうですラッコです。ラッコは昆布に巻かれて眠ります。更に質問致します。「ラッコの好物は何でしょうか？」おそらく皆さんも大好きかと思えます。そうですウニです。ラッコは大量の甲殻類を餌にします。昆布の林では、ウニ・蟹・貝類などの甲殻類が育ち、これら甲殻類を餌にするのがラッコやアザラシなどの海獣類です。私が故郷の志発島を訪れた時に、昆布に巻かれてラッコが寝ていました。志発島の主な産業は昆布ですが、ホタテの缶詰工場もありました。昆布は、国内は元より上海などに輸出されておりました。昆布を採取するには独特の棹を使用します。棹に一番適していたのはアオダモの木です。これは富山から運びました。一方、生産された昆布は富山に送られ、国内はもちろん海外に輸出されました。また、島内の草原を利用し馬の飼育も盛んで、軍馬の生産地でした。水は豊かで飲料水には恵まれておりました。



色丹島には、東洋一の捕鯨基地があったと聞いております。島全体は、緩やかな稜線で緑の濃淡が美しく「東洋の箱庭」と呼ばれる独特の風景です。特に太平洋側のリアス式海岸の松と岩礁のコントラストは見事です。この島は高山植物の宝庫で色丹島にのみ生息する高山植物が沢山あるので戦前は多くの植物学者が訪れております。

国後島は、タラバガニや帆立貝の宝庫で、主な産業はカニ缶詰の生産です。昆布漁も盛んでした。世界で初めて、タラバガニの缶詰生産を手がけたのが国後島だとも言われております。カニは足（腐敗）が早くすぐに痛みます。塩漬けにも適しません。ここで質問致します。「カニ缶を開けるとカニの他に何が入ってますか？」そうです紙ですね。カニは酸が強いので缶が腐食します。試行錯誤を重ね、紙を入れると腐食を防げる。この技法は国後島で発明されたと言われております。この結果、国後島でカニ缶詰生産が軌道に乗りました。生産されたカニ缶詰は、国内は元より横浜から海外に輸出されました。最盛期には、本土から女工さんが大勢働きに来て賑わいました。

島の東方には、北方四島で一番高い「爺爺岳」が聳えます。オホーツク海岸には、海底火山で出来た見事にそびえ立つ柱状節理の「材木岩」があります。良質な温泉も湧く自然溢れる島です。昆布や海苔等、海藻類の生産も盛んでした。

択捉島は雄大です。島内の自然は正に絶景です。山また山、大小の無数の山が幾重にも連なり、ダイナミックな景観に圧巻されます。山から流れる川は大小200本もあります。湧き水は大湿原を作ります。何所までも続く草原は広大な原生花園、次々に可憐な花が咲き、大地を花の色で飾ります。

川は、陸の植物プランクトンを蓄えミネラルをたっぷり含んだ水を海に運びます。更に冬には、流水が動物性プランクトンを運んできます。栄養たっぷりの海は海草類の林で、甲殻類の揺り籠です。ラッコなどの海獣類の生育に最適です。ここで質問です。「海の動物で一番大きいのは何でしょうか？」そうですシャチです。シャチも生息しているのです。オキアミからシャチまでが育つ豊穡の海なのです。

延々と続く白い砂浜や白い崖、リアス式海岸。沢山の滝が海に流れ落ちております。特に島の東方にある「ラッキベツ滝」は落差141m、水量も多く圧巻です。もちろん温泉が湧き出ます。

どの島も、人々の生活に欠かせなかったのは馬です。船や昆布の陸揚げ、荷物の搬送や村から村への人々の移動にも使用しました。大きな島に「駅通」がありました。ここには沢山の馬が飼育されておりました。村から村へ移動する時に、馬に負担を掛けないように駅通で他の馬に乗り換えるのです。馬は大切にされておりました。

それではこれからは、私の家族の事を話します。私は、歯舞群島の志発島で生まれました。お手元の地図の48番です。島は、納沙布岬から約23キロ先に位置、島内は平坦で一面草原です。居住地は、主に東側と西側に分かれ私の生家は東側で、昆布漁を営んでおりました。

春から秋までは昆布漁の最盛期、この時期は一家総出で働きます。朝4時から起き、食事を終えると男衆は海に出ます。女衆は前日陸揚げした昆布を乾場に干し、船が帰るまで忙しく働きます。海の恵みを受け、島民全体が一つの家族のように助け合い平和でのどかな日々を送っておりました。昆布の生産は手間が掛かります。生の昆布は大変重いです。長い昆布を重ならないように乾場に並べます。半乾きになったら少し移動させます。夕方倉庫に入れる時も、少しお湿りが来るまで待ちます。乾燥していると折れるからです。そして冬に切り出して出荷します。

北方領土の本格開拓は江戸時代です。私の先祖は、南部藩の者でした。船を調達し、島に渡り昆布漁を手がけました。

昆布を生産するには、干し場を造らなければなりません。道具のない中、手仕事で野原の草を抜き少し掘り起こします。そこに浜辺から砂と小石を大量に運び敷き詰めます。その上に、更に土を掛けてしっかり固めます。その時、中心を少し高くして緩やかな傾斜を付けます。これが完成しましたら、基盤目の溝を掘ります。ここで質問です。「何故こんなに手間を掛けるのでしょうか？」雨水のはけを良くするためです。昆布が乾燥する時の一番の天敵は水です。溝が完成すると更に小石を敷き、その上に砂を敷きしっかりと固めます。干場造りは、正に祖父が血と汗で築いた土地です。

自然と共に暮らす人々は春を待ちます。枯草の間から、ネコノメ草が黄色の可憐な花が顔を出すと春が訪れたのです。次いでクロユリ。カッコウ草（千鳥草）が咲くと子供たちは野原で花を摘み、誰が一番立派な花を見つけられたか競い、採取した花をお寺等に届けました。

それでは、ここから四島占領の状況、脱島と強制送還、望郷の念、その他をお話し致します。

平和に暮らしていた人々が戦争を身近に感じたのは、1945年7月、根室の方向の空が真っ赤に染まった時でした。これが一週間ほど続いたそうです。根室がアメリカ軍の空襲を受け、街の8割が焼け野原になったのです。赤く染まる空を見て、根室の親族を案じながらも家族はいよいよ島にも来るかと思ったそうです。そうしている中、8月15日ラジオから流れる天皇陛下の声を聞いたそうです。島民も家族もこれからどうなるのかと不安を抱きました。アメリカが来るなどと噂が出ましたがこれまでどおりの生活を続けておりましたが、予想してないことが起こりました。9月3日、沖合に大きなソ連の軍艦が現れ、ソ連兵が銃を構えて上陸して来ました。島が占拠されたのです。そして、人々はソ連軍の管理下に置かれました。島民は根室との連絡も遮断されソ連軍の監視の下で不安な生活を送ることになりました。恐ろしくて脱出する人もおりましたが、先祖から引き継いだ大切な島なので大半の方は島に留まりました。しかし年頃の娘がいるので、暴行されるのではと親は不安でした。ある夜、娘さんは親から島を出る事にした。何時でも脱出できるように準備して置くようにと言われました。

島を離れると思うと、恐ろしくて悲しくて眠れなかったそうです。しかも、脱出する時はソ連兵の監視が怠る大嵐の時か濃霧の深夜です。それから数日後の嵐の夜、寝付いたらお父さんに起こされたそうです。声を立てるなど恐ろしい顔をしていたそうです。いよいよかと思うと足がガクガクし大声で叫びたくなったそうです。暗闇の嵐の中やっと船に乗ると、お母さんが着物の襟に小さな袋を縫い付けました。「この中には毒入りの饅頭が入っている。万が一ソ連兵に見つかり、乱暴されるようになったらこれを食べましょう」と言いました。縫い付けられた袋を握ると涙が溢れました。

大時化の中、船は島を離れ根室に向かいましたが航行不能になり、近くの浜辺で休む事にしました。大波に襲われながらもどうにか浜辺に上陸し、時化が収まるのを待ちました。夜が明け辺りが見えてきました。目に飛び込んできたのは、浜に打ち寄せられた死体でした。先に脱出した知人でした。自分もこうなるのではと思うと、悲しくて恐ろしくてたまらなかったそうです。せめてもの供養と思い、傍に落ちていたホタテ貝を使い死体に砂をかけたそうです。

やっと嵐が収まり再び船に乗りました。お母さんと抱き合い、ずっと船倉に身を屈めていました。何時間かたった時、「もう出て来て良いぞ」とお父さんの声が聞こえてきました。甲板出ると根室の街並みが見えました。

お母さんと毒入りの饅頭の袋を襟から取り合いました。彼女はその後、故郷の国後島が見える根室で生活しています。故郷には帰りたいが、脱出した時の恐怖が蘇るので海峡を渡ることは出来ないと話しておりました。脱島した多くの方が、時化に合い遭難しております。

ある家族は、別々に船に乗りましたが目の前で父の乗っている船が沈みました。

皆さんのお手元に冊子「北方領土」が配布されております。この冊子には、島々が占領された時の様子と送還までが分かりやすく書かれております。私たちが編集したものです。後程読み、このことを多くの方に語り伝えて下さい。

私の島の話に戻ります。ソ連兵は銃を構え大きな建物から次々と占拠し、次いで土足で一般の家に入り込んできました。家族構成と軍人を匿っていないか調べました。言葉も通じない、しかも銃を構え土足で上がり込んでくるので怖くて震えあがりました。私の村では、故人のお骨は墓地でなくお寺の骨堂に収めておりました。ソ連兵は骨箱に何か貴重なものが入っているのかと思ったのでしょうか、骨箱を次々にひっくり返しお骨を散らかしました。腕時計も戦利品として幾つも腕に付けていたそうですが、ネジを巻くことを知らないので止まると捨てたそうです。

私は、生まれて間もなく一歳でした。家族は危険を避けるために、母と私を屋根裏部屋に隠したそうです。そうしているうちに、ソ連兵の島内巡回パターンが分かるようになりました。ある日巡回予定日には無いので、母は私を抱いて居間に降りておりました。その時、ソ連の将校が家に入ってきたのです。家族はソ連兵を騙していたのがバレてしまい凍り付いたそうです。母と私を見たソ連の将校は、ビックリしたそうです。将校は何か言いながら母に向かい両手を出したそうです。その時、母は信じられない事をしたそうです。将校に私を渡したそうです。母は将校のしぐさに子供を抱きたいと感じたそうです。将校は私を抱き上げてあやしました。おそらく私は笑って可愛らしかったのでは…。その時、将校は自分にもこのくらいの子供がいると、身振りで伝えたそうです。母は恐ろしさが消え、この人も子供を大切にする普通の人なのだと思ったそうです。

大人になってからこの話を聞いた時に、なんと薄情な母かと思いました。普通は、抱きしめて絶対に渡さないはずですね。でも、母が私を将校に渡したことがロシア人の心を開き家族がロシア人に対する恐怖を抱かなかったのでしょうか。

その日から私は将校と仲良しになり、私の事を「タイカー」と呼ぶようになり、島を離れる日まで自分の子どもの様に可愛がったそうです。私は子供の頃からこの話を良く聞かされたので、ロシア人に対して恐怖心はありませんでした。

不自由な暮らしにやっと慣れた頃、本土送還が伝えられました。時々、何故島に留まらなかったかと聞かれることがあります。本土送還に従わず島に留まるとソ連の国籍に入れられるのです。子供たちをソ連人にするわけにはいかない。送還に従うのは苦渋の選択でした。

1947年11月、送還されることになりました。島を離れる前に家財道具を整理しました。「必ず島に帰れる」と思い、家財道具等大半を軒下に穴を掘り埋めました。持ち出せる量が決められましたのでリュックに詰めました。ソ連の将校が来て「今、日本は食糧が不足している。食料と衣類を持ったほうが良い」とアドバイスしてくれたそうです。当座の必要品を中心に手荷物を造りました。

私は3歳、妹は生後3ヶ月でした。11人の家族に島を離れる日が来ました。集合の西側に向け、誰も声を出さずしっかりと手を握り悲しく虚しく色々な想いを抱きトボトボと草原を歩きました。合地点の西側の浜辺には島民が沢山集まっておりました。沖合に大きなソ連の貨物船が停泊しておりました。ソ連兵の指示のもと炎天下の中、長時間立たされ一人一人確認されやっと小さな伝馬船に乗せられ、沖合の貨物船に向かいました。貨物船の傍に着くと見上げる高さでした。船に乗るタラップはありません。

貨物船に乗せられる時、網袋はウインチで一挙に10mほど吊り上げられました。網袋は大きく揺れます。網袋の下は海です。恐怖で泣き出す者、念仏を唱える者、失禁する者もありました。そして船倉に降ろされました。生きた心地がせず声も出せない状態でした。やっと全員が収容され、船が動き出しました。貨物船は他の島を回り、次々と日本人を収容しました。船倉が満杯になると甲板に置かれました。貨物船は根室に向かいませんでした。向かった先は樺太でした。初冬の北の海は荒れ狂い、船倉は船酔いの嘔吐などで悪臭が漂い、船倉も甲板も人で大混乱でした。トイレの数も不足、船倉に入れられた年配者や幼児は急な梯子を登れません。やむをえず空いた容器に用を足します。甲板の人は甲板の端で用を足しました。時化の海水が甲板を襲い、この嘔吐物や汚物を含んだ海水が船倉に流れます。船倉の人は汚物を含んだ海水を頭から浴びるのです。地獄の様な有様でした。体力のない老人や幼児が亡くなりました。遺体は病気が発生するので海に捨てなければなりません。私たちは、荷物以下に扱われたのです。

船が辿り着いたのは樺太の真岡でした。私たちを収容する収容所は丘の上にあります。樺太の大地はもう凍り始めておりました。小雨が降る中、父は両手に荷物を抱え背負ったりリュックサックの上に私を乗せ、姉の手を取りました。母は荷物を抱え、妹を背負いました。祖母は兄の手を取り、家族は黙々と足を滑らしながら崖の小道を登ったそうです。収容所は女学校でした。建物は満員になると後から来た人はテントに収容されました。

収容所の食事は乏しく、黒パンと具が入ってない塩スープのみで、体力の無い人は「マンマが食べたい。マンマが食べたい」と言いながら亡くなりました。亡くなった人は集められ、トラックに積まれ郊外に運ばれ大きな穴に埋められました。

その後、日本の船が迎えに来ました。そして辿り着いたのが北海道の函館でした。やっと北海道に着いた。皆は涙を流して抱き合いました。私たち家族は根室に向かいました。根室では11人の家族と一緒に住む家が無いので、親戚の家や母の実家に分かれて住むことになりました。以来、私たち家族は今日まで一度も全員で生活することができなかったのです。私にとって島は家族が全員で暮らした唯一の所です。

引き揚げて2年後、やっと船を購入して運ぶ途中、父は事故で亡くなりました。父の突然の死で、子供4人を抱えた母の生活は大変でした。早朝から深夜まで働き詰めでしたが、学用品も満足に買えず食べるだけがやっとでした。苦勞しました。先に話しましたが私の曾祖父は江戸末期に島へ渡り、4代に渡り昆布漁を営んでおりました。曾祖父は祖母の父親でした。

ある年、志発島は春になっても海が荒れ、定期船が立ち寄れない日が続きました。とうとう備蓄していた島民用の生活物資や米が底を付きました。止む無く、島の有志3人が船を出し、根室まで買いに行くことになりました。3人の中に曾祖父もいました。一行は、根室で米や生活用品を買い島に戻りました。島の丘の上には、島民と家族が待ち受けておりました。その目の前で船は横波を受け沈みました。全員死亡したのです。祖母は丘の上から自分の父親が乗っている船が沈むのを見たのです。

祖母は、引き揚げるまで月命日には船が沈んだ近くの丘の上から海に向かい手を合わせていたそうです。引き揚げ後、祖母はお参りが出来ない事を悔やんでおりました。そんなこともあり、一家の中で島への思いは祖母が一番強かったのです。

祖母は「あの島は俺の島だ。もう一度島に戻り家族全員で暮らすんだ」と言い続け、島の話をして聞かせてくれました。

強制送還されて20年過ぎたある夏の日、島を見ていた祖母は突然海に入り、島に向かって歩き出しました。その時は家族が気づき引きずり戻しましたが、冬納沙布岬に近い川に身を沈めました。川の水は、祖母の想いを包み海を越えて島に辿り着いたでしょう。島に帰るのだと言い続けていた祖母が…何故。おそらく、大好きな島を追われ、家族の離散、最愛の息子を事故で失い先祖の供養も出来ない、祖母の心はボロボロだったのでしょう。

平成元年、墓参団員として生まれ故郷に渡りました。島の近辺で耳にしたのは波の音と波が運ぶ小石の音でした。母がお嫁に来た時、波の音が耳に付き眠れない日が続いたと言っておりました。打ち寄せる波と小石の音は「故郷の音」でした。

浜辺に額ずき小石を両手ですくいました。私の「故郷です」。祖母があんなに帰りたがった島。家族が全員で暮らした島。涙が止めどもなく流れました。祖母の代わりに海に向かって手を合わせました。出来ることなら「祖母を伴い、家族全員で来たかった」のです。

北方領土を故郷にする私たち島民は、皆で一緒に島に帰ろうと励ましあい生きてきました。返還要求運動の先頭に立って頑張ってまいりました。毎年、今年は帰れると願いながら70年です。未だに願いは叶えられません。無念です。悔しいです。辛いです。

北方領土は私達島民のみならず。大切な日本国民の領土です。皆さん一人一人の島です。自分の問題としてしっかりと受け止め、本日の話しを少しでも活かしてご婦人らしい発想で返還要求運動に取り組んでいただきたくお願い申し上げます。

択捉島元島民二世 宝 金 まさみ さん

緑川町の皆様こんにちは。私の祖父母と父、父方の兄弟姉妹は、かつて択捉島留別村の入里節地区マタルザルに居住しておりました。私は元島民二世として、北方領土の返還運動に携わっています。現在は北海道の南の端、函館市に住んでおります。

この語る会のお話を頂いた時、しばらく語り部を休止しておりましたが四国、香川県と聞き是非にと思いやってきました。十数年前に高知で話したことはありましたが瀬戸内は初めてです。語り部を再開した理由は、今年で戦後70年、元島民の平均年齢は80歳を越え「高齢化」と一般的には言いますが、「老齢化」－人間が老いてきた－長く生きてきて体力も、考える力も弱くなって来たと感じるようになったからです。

戦前に島で生まれ、戦後を生き抜き、平成も27年まで苦労の中生きてきた証を私達後継者が語って行かなければ、北方領土で日本人が村を作り生活していた事さえ忘れ去られてしまうという「怖れ」が私をここ緑川町に連れて来た訳です。

「北方領土」と呼ばれているのは択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島からなる島々です。面積は択捉島が一番大きく3,167km<sup>2</sup>、ここ香川県は1,876km<sup>2</sup>ということですから約1.7倍の大きさになります。色丹島と国後島を併せた広さがほぼ香川県の面積と同じになるようです。北方四島の総面積は5,003km<sup>2</sup>で千葉県面積とほぼ同じだそうです。また、北海道の別海町、野付半島野付崎から国後島はわずか16kmしか離れておらず、高松市から小豆島が20kmというのですから本当に目と鼻の先といったところです。

私の祖父は新潟県で生まれ、大正4年に択捉島の年萌に渡りヨード製造に従事しました。択捉島は、昆布はもちろんのこと銀杏草、布海苔、マツモといった海藻の宝庫であったからです。その昆布などの海藻を燃やした灰からヨードを抽出するのですが、これを燃やした際の煙などで環境汚染が指摘され、その作業を辞めて入里節地区マタルザルで所帯を持った頃は、海藻の採取で生計を立てながら漁業組合の設立に奔走したそうです。

銀杏草と言うのは、佃煮にすると岩海苔より絶品で何よりトロトロとした舌触りが病みつきになるようです。その粘性、粘り気から建築用にセメントに混ぜて家の外壁等に使ったとも聞きました。また、「千島海苔」と言われた海苔は、14歳になると木で出来た鑑札の札が渡され、子供でも生活の足しになる程度、採ることが出来たそうで、採った海苔は畳一畳の大きさに梳いて乾燥させます。函館の海産商では、当時中国との取引で仕入れ値の40倍の値段で売れたというほど珍重されていたようです。

叔母が営んでいる洋装店の土地を借りている地主さんが、大正、昭和初期には我が家は海産物問屋で千島での取引で儲けて今に至っていると話して下さり、この千島海苔の話をしてくれたのです。どうりで見覚えのある屋号だと思った叔母は、当時海藻を取引していた函館の店だったと知り、その巡り合わせの偶然に驚いたようです。

祖父は入里節地区、イリリブシと言うのはアイヌ語で「いら草の多いところ」という意味で、元島民の方はいら草の事をムレッツと呼んでいます。その入里節地区の区長として村民の暮らしを守りながら、20歳も年の離れた祖母との間に三男四女を設けました。私の父は下から二番目の次男で、平成22年に他界しましたが現在函館で同居している叔母は83歳と87歳になりました。

その二人の叔母は、いつも昔の島の暮らしを懐かしみ私に話して聴かせてくれます。その中で何度も聴いて、まるで私自身の思い出であるかのように感じられる島でのエピソード、また戦後の暮らし等を皆さんにお話したいと思います。

島の「食」は、平成を生きる私達でさえ羨ましくなるような美味しくて、体に良い天然の物をいつでも食べていたと言う事を、どの方も言われます。先程お話した海藻をはじめ、魚は鮭・鱒・鱈・アブラコ・タラバガニ・アワビ、ウニも沢山採れたということです。幼い頃に味覚は決まると言いますが、その叔母たちの味覚に合う魚は海の街函館でもそうありません。春に根室を訪れた時、海鮮市場で見つけたアブラコは鮮やかなレンガ色をしていて、道南近海で漁れるものとは明らかに違っています。あっさりした油が口の中でとろける様でした。これが島の味だそうです。

野菜も海藻を畑の肥料にしたのでよく育ったそうです。コメや穀類、お菓子などは定期船で島の海産物を送る際に、伝票に必要な食料品を書いて入れると、コメは青森の黒石米、その他お菓子などは函館の海産問屋が一斗缶に入れて送ってくれました。一番上の兄が伝票を書いていると「あんちゃん、ビスケットも書いてね!」と言ったそうです。

私たちが一番驚いたのは、トド肉とゴメの卵の話です。ゴメとはカモメのことで、ゴメ島という断崖絶壁の岩がありその上の方に産卵しているのを、男の子達が登って捕ってくるそうです。トドは「トド会社」と島の人たちが呼んでいた会社があり、食肉として、また油を食用としていたそうです。塩ゆでしたじゃがいもに、トドの油をまぶして醤油を垂らすとこれがまた絶品ということです。

また、二人が「フレップ」と言っている木の実は、おやつになるので子供だけで採りに行き、夢中になって採っていたら熊の気配を感じて慌てて逃げ帰ったというエピソードもあります。その他コケモモや、ガンコウランの実。ポリフェノールやアントシアニンが豊富に摂れそうです。

ある時村のアイヌのおばあさんが、沢山実のついでにある場所を教えてくれて子供たちが楽しそうに採っている傍で、アイヌの民謡を口ずさみ踊りながら微笑んで待って居てくれた。そんなのどかな日もあったそうです。しかし、この幸せな子供たちに悲劇が起こったのは、兄弟の一番下の男の子がまだ3歳の時のことです。

昭和17年の初秋、私の祖母に当たるその子供達の母親は、お腹に新しい命を宿していました。臨月を迎えた頃、体調が悪化し隣村の診療所の医者にも何度迎えをやって一向に往診に来てくれない。やっと診察をしてもらいましたが、思わしくなく子供は死産でした。もう産まれるばかりに育った赤ちゃんは、三つ子だったそうです。初着にと用意していたうさぎ柄の着物は、玉をつけずに縫い上げる死装束になってしまったのです。その後、衰弱しきった祖母は満足な薬もないまま10日後に亡くなりました。七人の子供の母親は、37歳の若さでこの世を去り入里節のお墓に埋葬されました。

どんな慰めの言葉も通じず、泣き続ける子供たちに近所のお兄ちゃん二人が「お母さんのお墓の所に千島桜の木を植えたよ。寂しくなったらこの木を見においで!ちゃんと世話をしたら春には綺麗な花が咲くよ!」と言ったそうです。けれどその近所のお兄ちゃん達は、召集され沖繩戦で戦死したと引き揚げて来てから知らされたと言うことです。

それからはこの一家に様々な試練が起きました。母親が亡くなった翌年の春「これから洋服の時代が来る」という父親の言葉を信じ、上の叔母は釧路に渡り洋裁の勉強をすることになりました。それから1年足らずで戦況の悪化を知った祖父は「もし日本が負けたら自分は島から本土に戻れなくなるかもしれない」と考え、釧路に居た叔母と私の父を生まれ故郷の新潟に行かせることにしたのです。

一家は散り散りになりました。ろうあ者だった長男と既に婿をとっていた長女、四女と一番下の男の子は択捉島に残り、三女は色丹島で水産加工場を営んでいた親戚の家に、そして次女と私の父である次男は新潟の本家に。

次女である叔母は、新潟で高田の高等女学校に編入し、本家の農作業を手伝いながら小学生の弟の面倒をみることになりました。親戚で、米どころと言ってもお腹いっぱい食事をすることは出来ず、辛い農作業の合間に勉強し、やんちゃな弟を叱りながら耐えて居たそうです。まだ幼かった父は、悪さをしてその家の人に小言を言われると「まこ、島に帰ろうよ。これから汽車に乗ってさ。皆のところへ帰ろうよ。」と何度も言ったそうです。

やがて終戦を迎え、思いもよらないソ連軍の侵攻に島民は困惑しました。同じ択捉でも村によってソ連への対応は違ったようです。女性の髪を切り隠したとか、洗面器に張った水に食紅を溶かして肺病を装ったとか。しかし、択捉に来る前にカムチャッカに居たことがあった祖父は、ロシア人の性格を解っていたらしく、ただ怯えるのではなくむしろ相手を歓迎し受け入れるといった手法で切り抜けた、という逸話を叔母たちは自慢げにいつも話します。

学校の教室に机を付けて並べ、その上に白い布をテーブルクロス代わりに敷き、はまなすの実（赤いプチトマトのような実）で作ったジャムやじゃがいものスープ等、ご馳走をならべ、今で言う「おもてなし」を行ったそうです。そのためかソ連兵は悪いことは出来ず、とても穏やかだったそうです。

ある時、ソ連軍の将校が来て「もし、私たちの兵隊が皆さんに危害を加えたら投獄するから教えて下さい。」と言ったそうです。

この話には私も驚きました。けれど、悲しいことにその時の「仮婿」さんとして匿っていた日本軍の軍人の方たちは、ほとんどの人が「宝金さんには迷惑をかけられない。」と終戦後、日本兵だと名乗り出てシベリアに送られたそうです。

昭和22年に、島に残っていた家族は引き揚げが決まり、祖父が研究のため作っていた海藻の標本は浜で焼却し、新潟を出るとき携えてきた日本刀は住んでいた家の軒下に埋めてきたそうです。子供たちは何枚も着物や服を重ね着させられ、一番小さな子も自分の背丈ほどもあるリュックを背負いソ連の貨物船に乗せられました。

母親のいない家族です。まだ8歳だった末っ子の伯父は不安と恐怖、船の揺れに怯え、船底が左右に揺れるたびに小さい体が転がり「そんなに泣くとロスケに海に投げられるよ！しっかり荷物に掴まりなさい！」とすぐ上の姉に叱られながら樺太の眞岡に着くまで生きた心地がしなかったようです。それが原因なのか76歳になった今も船酔いが激しく、島への自由訪問に同行して欲しいと説得しても、首を横に振るばかりです。

樺太から今度は日本の船で函館に移送された引揚者は、行き先が決まった家族から移動しなければなりません。祖父は、新潟に預けた次女と次男の安否を確認するために新潟の本家を訪れましたが、宮城の別の親戚の家に行ったと知りました。そこで、新天地と決めたオホーツク海側の北見、常呂町に向かい、そこで待っていた長男と長女夫婦、色丹島から引き揚げてきた三女、その後やっと連絡が取れ宮城からやって来た次女と私の父と家族が再会出来ました。

山の中の三角兵舎で暮らす中、祖父はまだ島に残って居る同じ村の人達にこちらの状況を知らせようと、ロシア語と日本語を交えながら郵便はがきを6枚書いて出したそうです。その中のたった1枚だけが知り合いの元に届きました。書いたハガキの内容は、1つの村を作り、集団移住をさせて欲しいと懇願したが叶わなかった。無縁故となると、多くはオホーツク側に行かされるようだ。函館の役所では持ち物を没収されなかったので、海苔を干して鮭は燻製にして持ってくる



ように。当座はそれを売れば生活の足しになる。などということでした。昭和23年、最後に引き揚げてきた人は「宝金さんのハガキのとおり用意してきたらとても助かった。ソ連兵が宝金はソ連のスパイだと判り牢獄に入れられたと言っていたよ。けれど俺たちは宝金さんを信じたんだ」と祖父に言ったそうです。

常呂町での暮らしは短く、祖父が関係していた雪印関連会社の人の“つて”で道南の駒ヶ岳の麓にある軍川に入植した一家は、火山灰で作物の生育もさほど良くない土地を耕していましたが、兄弟の上の者は働きに出て次女である叔母は釧路で身に付いた洋裁を生かし函館の洋裁店で働くことになりました。働いた給料は全て一家の生活費になる中、独立して家を借り四女と二人三脚で働き、下の弟二人を中学、高校、大学と進学させ、父親を看取り、生活が安定するまで働き詰めでした。そして弟の助けを借りて小さな会社を作り今に至っています。

「島は私たちが生きていうちに帰って来ないだろうね。ロシアとの交渉はまたお預けかい？」とニュース番組を観ながら溜め息をついています。そんな叔母二人を連れて、択捉島、入里節に渡航したのは今年で4回になります。平成24年に自由訪問で行った時は、入里節の浜から上陸し墓標のある丘まで歩きました。37歳で亡くなった祖母と三つ子の子供、父と双子の片割れで死産だった子供。親子が眠る墓地は小高い丘の上にあります。

本当はもう少し奥地が村の墓地だったそうでしたが、背の低い針葉樹に覆われてしまっていて墓地調査の人たちが少し手前の開けた場所に墓標を立てたそうです。仰ぎ見ると、頂きに残雪のある群青色の山脈、眼下には入里節の砂浜に波が寄せる風景でまさに世界自然遺産に認定されてもおかしくないと思いました。

「この空気が吸いたくて今度も来たんだよ。」と深呼吸しながら叔母は言います。ロシアの実効支配が70年も続いているけれど、昭和17年に亡くなった祖母、もっと前に島の地に埋葬された島民の方々の体は、当時は土葬でしたから、島の土に溶け雨が降り、川に溶け出し、千島の海に流れ、波になって浜へと寄せ返しているのではないかと思います。

今年6月初めに行われた自由訪問は、荒天のため一晩根室港で過ごしてから出航しましたが、意地悪な海のうねりに邪魔されて上陸は叶いませんでした。もしかしたらその波がうねりとなり「時々訪ねてきてはすぐ帰るんじゃ許さない!!」と怒っているのではないかと思うと、私たち後継者の無力さが北方領土を「近くて遠い島」にしているようで悔しさがこみ上げてきました。

私は昨年度から千島歯舞諸島居住者連盟の「後継者活動委員」として地元函館はもちろんのこと、年に1度札幌の地下歩行空間で啓発のイベントを行い、各支部の特産品を配布しながら署名をお願いしています。若い人達に理解して頂くため、タブレット端末を使った北方領土クイズにも挑戦して貰っています。

ウクライナ問題が勃発してからアメリカの顔色を窺って領土交渉は停滞し、日本の外交は更に難しい局面に立っているようですね。プーチン大統領の来日も、今年中にならないようです。日本では8月15日が終戦の日でも、ロシアや中国では9月3日が抗日戦勝利記念日であり、先の大戦で大敗した我が国はその時点から不利な立場で、いくらロシアが中立条約を破り参戦したのは国際法に違反すると世論で訴えてものれんに腕押しな感じがあります。けれどその流れに流されているのは、日本は本当の敗者になってしまうのではないのでしょうか。島の波になってしまった方々に申し訳ない気がします。

ロシアの排他的経済水域での鮭鱒流し網漁が禁止になり、あけぼの印の鮭缶の製造も危ぶまれるようになったと北海道新聞の記事にありました。かつて、函館も根室も北洋漁業の基地であり、その恩恵で街には活気が溢れていました。恵の海は200海里に狭められ、更にこれからは事実上、

北海道沿岸のみでの操業となると、北の海はとても狭くなってしまったと言えます。

本当は香川に来たら金比羅神社をお参りしたかったのですが、滞在時間が短く叶いませんでした。海の神様と聞きました。次、プライベートで訪れるときは長い石段を上り北方領土の島も、海も、返ってくるように！とお願いしたいです。

水晶島元島民 吉田義久さん

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました元北方領土水晶島に居住し、現在富山県に住んでいる吉田です。本日、愛媛県宇和島市婦人会連合会にお招き下さりまして誠にありがとうございました。北方領土元島民として、当時の生活などをお話する機会をいただきました事を感謝いたします。

何分私は、この様に皆さんの前でお話をする事には大変不慣れですので、お聞き苦しい点や判りづらい点多々あろうとは存じますが、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

まず、北方領土とは皆さんもご存知のとおり、根室半島ノサップ岬よりわずか3.7kmしか離れていない歯舞群島貝殻島より始まり、色丹島、国後島、択捉島なのであります。私は、その歯舞群島水晶島で昭和12年8月10日に生まれ、昭和20年8月末まで過ごしました。その間、島で生活した体験や記憶をお話いたします。

当時まだ9歳で、島での生活は本当に詳しくは憶えてはいませんが、断片的には記憶があり、今は亡き両親から当時の島での生活について聞いた話などを交えてお話いたします。

私が住んでいた歯舞群島水晶島、そして色丹島、国後島、択捉島は江戸末期、明治初期より日本人が苦労を重ね、幾多の困難を超えて開拓した歴史のある日本固有の領土なのです。この北方の島々は、暖流と寒流とが交わり世界三大漁場といわれる漁業資源の豊富な地域で、鮭、鱒、カニ、ニシン、昆布など豊富な漁業資源に恵まれています。その島々に定住し、長年に亘り血と汗の結晶で築き、北海の荒海と闘い命を懸けて開拓しました。

私達北方領土元島民にすれば、それぞれの島にそれぞれの思い出があります。楽しかったこと、苦しかったこと、それぞれの思い出が戦後70年経過した現在でも、私の胸の奥に深く残り、くつきりと焼き付いています。

北方の島々は、大変厳しい気候と想像されると思いますが、私の住んでいた水晶島は冬になれば一面雪と氷に覆われて厳しい時期もありますが、四季を通して美しい自然もあります。春5月ともなればハマナス、スズラン、アヤメ、黒ユリなどの花々が草原一面に咲き乱れ、小鳥が甲高くさえずります。その季節になりますと昆布漁が最盛期に入り、私達子供も学校へ行く前に昆布干しを手伝ったり、干場の草を摘んだり、子供には子供なりの仕事がありました。私の家族は、毎年この島を本拠地に昆布漁を行い、また沿岸漁業を営み生活基盤を築いていたのであります。

生活も次第に安定し、さてこれから仕事も軌道に乗って事業を拡大しようとしていた矢先の昭和20年8月15日、大変厳しい世界大戦も終戦を迎え、私達島民もホッと一息をつき仕事も落ち着いて出来ると思っていた時に、突然9月1日ソ連軍が島へ上陸して来ました。日本有史以来、どこの国にも支配されたことのない日本固有のこの北方の島々が、数日のうちに占拠されてしまいました。私達島民は、ソ連軍の上陸で大変な恐怖とパニックにおそわれ、一夜のうちに故郷が奪われ島を追われたのであります。

全財産を失い、命からがら身一つで根室に追われてきた元島民は住宅難、食料難、就職難に見舞われ、筆舌につくせぬ苦労がありました。

このように当時の記憶をたぐってお話いたしますれば、恐ろしい記憶や懐かしい故郷の様子が昨日の如くありありと浮かんでまいります。

皆様一人一人に懐かしい故郷の思い出がありますように、私にはその頃の島の様子一つ一つが走馬灯のように懐かしく思い出されます。

戦後70年も経過しましたが、未だ故郷の四島はロシアに不法占拠されたまま返還されません。私達元島民は引き揚げ以来、今日まで故郷を偲び四島の返還を叫び返還運動に力を尽くしてまいりました。終戦以来、各地で北方領土返還運動が展開されてまいりました。今日も愛媛県宇和島市婦人会連合会の皆さん多数のご参加をいただき心より感謝申し上げます。私達元島民は先人の流した血と汗と涙を決して忘れず無駄にせぬよう四島の早期返還を粘り強く叫び続けてまいる決意でございます。

最後になりましたが、本日ご参集の皆様方のご健勝とご多幸をご祈念申し上げ今後尚一層北方領土返還にご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。ありがとうございました。

みなさん初めまして金田慎吾と申します。私は、北海道の石狩市というところに住んでいます。石狩市は札幌市のお隣の町で、石狩川の河口にある街です。主な特産物は鮭ですが、それ以外には特にこれといった産業の無い、札幌市のベッドタウン的な街です。

ところで最近、ちょっと大きな自然災害が頻繁におこっていますね。1年前の御嶽山の噴火や地震、毎年大型化する台風など、被災された方たちは本当に大変だと思います。なかでも、東日本大震災。あの衝撃的な映像は、今でも目に焼き付いています。そして追い打ちをかけた原発の問題。放射能のおかげで未だに帰れない、いや、いつ家に帰ることができるのか全く分からない人達がいるのです。故郷を失うことはとても辛いことだと思います。

実は、あの第二次世界大戦で故郷を失って未だに帰れない、福島の人のように未だ故郷に帰れず、70年もの長い間、辛い思いをしている人達があります。そうです、北方領土に住んでいた元島民の方たちです。

北方領土は択捉、国後、色丹、歯舞群島で構成され、北方四島とも言われています。その面積は5,003.1km<sup>2</sup>になります。皆さんの住んでいる愛媛県の面積は5,676km<sup>2</sup>ですから、ほぼ同じくらいの面積と言えます。

ちょっと想像してみてください。ある日突然、ここにみなさんが住めなくなることを。「四国は他の国が統治するので、他の地に移住しなさい」なんて言われたらどうしますか。「家も、仕事も、学校も、お墓も、何もかも捨てて、今すぐここから出て行きなさい！ここは、これから違う国が支配します」なんて言われても困りますよね。どこへ行ったらいいのか、仕事は？学校は？住むところは？明日からどうすればいいのか？想像してみてください。途方に暮れますよね。

でもこんなことが実際にあったのです。これが北方領土問題なのです。今の自分にあてはめて、想像してみてください。今、住んでいるこの地を、着の身、着のままで、出て行くことを……。北方領土に住んでいた人たちの苦勞が、そして、どれだけ大変な思いをしたか。おそらく、今さまざまな災害などで避難生活している人も、同じような状況でしょう。でも、それが70年続いているのです。特にあの時は終戦直後ですから、親戚や知人を頼ってもみんな大変な時で、迷惑を掛けることもできない。その辛さたるや、私たちの想像を遙かに超えるものがあつたんだろうと思います。沖縄も終戦後、アメリカの占領下にありましたが住民はそこに住むことができました。今でも米軍基地の問題などがあり、沖縄の人達も本当に大変だとは思いますが、北方領土の人達はそこに住むことさえ許されませんでした。こんな理不尽なことはないです。いきなり住んでいる所を追われて、そこに行くことすら出来なくなって、生活の基盤を根こそぎ奪われたのですから。

誰でも言います。「ふるさとを返してくれ」と。「家を、土地を、お墓を、思い出を、私達のふるさとを返して欲しい」と。ただそれだけです。しかし、未だ元島民の願いは叶えられません。

島に帰りたくて、帰りたくて、願い叶わず亡くなった人もたくさんいます。それもそのはず、終戦からもう70年も経ってしまいました。当時20歳だった人も、もう90歳です。私たちは急がなければなりません。元島民の人たちが生きている間に、北方領土を返してもらわなければ、意味が無いのです。

そしてこの北方領土問題こそ、国の都合で元島民の方々に辛く悲しい思いをさせたものであると言えると思います。人生を狂わせられた人の数で言えば、北朝鮮の拉致問題でさえも北方領土問題の比ではありません。私はこの北方領土問題が、国を挙げて真剣に取り組んで行かなければならない、重大な問題だと考えております。

ただ、人生を狂わせられた私の母は、北方領土から引き揚げて来たおかげで私の父と出会い、私が生まれました。人生が狂ってしまったおかげで生まれた私はちょっと複雑な心境で、逆に旧ソ連に感謝しなくてはならないのかもしれませんが、それはまた別の話でやはり正すべきものは正さないといけないと思います。

私の母は昭和4年生まれで、今年86歳になりますが昨年私の娘、つまり孫と一緒に国後島に墓参に行ってきました。孫と一緒に自分の故郷に行けたのは、母にとってとても喜ばしいことであったようで、その時の話をとても嬉しそうに話してくれました。また、私の娘もとても貴重な体験をしたと話してくれました。

特に娘が驚いたのが、自分のおばあちゃんが現地のロシア人ととても流暢なロシア語で会話していたということでした。確かに、おばあちゃんがいきなり外国語をペラペラしゃべりだしたらびっくりしますよね。娘は思わず「ばあちゃんかけ〜！」と言ってしまったそうです。

母がロシア語を話せるのは、終戦後もしばらく北方領土に止まり数年間ロシア人たちと生活していたからです。よく北方領土からの引揚者という言葉が使われますが、その実態は引き上げではなく脱出と強制退去です。脱出は終戦後、ロシア人が侵攻してきたため決死の覚悟で脱出した人たちで、母のような人は戦後数年たって国から強制退去の命令が出て島を離れた人たちです。どちらもとても過酷な状況であったと聞いております。

8年前、私はロシアの首都モスクワに行ってきました。モスクワではいくつかの公的機関を訪問しましたが、いずれの意見交換においてもロシア側の見解が、北方四島については「第2次世界大戦という戦争の結果としての国境線の形成である」という主張で、日本側の「固有の領土」という見解とは大きな隔たりがあります。

日本側が「第2次世界大戦ではソ連と直接戦争をしたとは認識していない」と反論すると「日本とソ連は互いに敵対するグループに所属していた」とロシア側は主張します。さらに日本側が「ソ連が北方四島に進行してきたのは、8月15日のポツダム宣言受諾後、つまり終戦後の8月28日から9月4日にかけてであり、これは、日本としては不法な侵略と認識している」と主張しました。みなさんは第二次世界大戦の終戦の日って何月何日か知っていますか？知っていますよね、当然8月15日ですよ。でも、ロシアは「終戦の日は、戦艦ミズーリ号で日本が降伏文書に調印した9月2日である」と回答したのです。これにはびっくりしました。私は終戦の日は8月15日以外の日を聞いたことがなかったので、こんな認識もあるのかと。国によって考え方や終戦の日の捉えも違って来るんだと。確かに正式な調印の日が終戦の日だと言われると、決して間違いではないとも言えます。日本の中だけに居ては分からないこともたくさんあることを学びました。

ロシア側は、「一度得た領土を引き渡すということは、ロシア国民の理解を得ることは決して無く、それは屈辱的な外交である」と言っています。私は、北方領土問題の解決を図るなら、極めて政治的な部分からのアプローチ以外にはないという印象を強く受けました。

1956年に、日本と旧ソビエト連邦との間で平和条約締結後、歯舞、色丹の2島を日本に返還するという内容の日ソ共同宣言が交わされました。ロシアはソ連の継承国としてその意義を認め、平和条約締結後に2島の引き渡しは行うということを言っております。しかしこれは返還ではなく、あくまでロシア側の善意による引き渡しである、と主張しています。戦争の結果としての領

土の帰属は、あくまでロシア側にあるという考え方です。したがって、残る国後、択捉両島は引き渡さないと考えています。しかし、領土の引き渡しを屈辱的外交と捉える国が、日ソ共同宣言で2島の引渡しを盛り込んでいるということは、そもそも北方四島の占領の過程に多少の引け目を感じているからに違いないと、私は思っています。

日本としては、日ソ共同宣言については、2島の引き渡し後に残る2島の引き渡しについて継続協議するものと捉えており、ロシア側とは基本的な考え方で対立しています。

9年前の10月19日にモスクワ市庁舎で開催された「日ロフォーラム」では、当時は衆議院議員だった鳩山由紀夫さんが「もう一度1956年の日ソ共同宣言の原点に立ち戻って考えることを提案する」と述べ、河野太郎衆議院議員が「日ソ共同宣言から日ロ両国がともに歩み寄り、例えば、国後島と択捉島を合わせた面積を1/2にし、択捉島に国境線を引くという方法もある」と具体的な提案をされました。ただ、ロシア側の対応については、この問題をできるだけ棚上げしたいという意図を全体的に感じました。とはいっても、日ソ共同宣言から節目の50年を迎えた年に行われたこの「日ロフォーラム」は、北方領土問題の解決の糸口となるような期待を持たせる有意義な大会でした。

私の個人的な見解としては、歴史的にもソ連の4島占領は侵略行為であり、国際的に見ても不当なものであると思います。しかし、両国が「4島だ」「2島だ」と主張し合っていたのでは、いつまでたっても解決の道は見当たらず、元島民の方が生きているうちに問題が解決するとは思えません。北方領土に住んでいた方たちに故郷を返すという最大の目標を実現させるためには、早急に領土返還に向けた現実的な対応を行うべきだと思います。そして、現実的に解決することを図るなら、両国が互いに譲歩し、ともに納得できる具体的な解決方法を提案し続けることが大事なのではないかと、モスクワ訪問で強く感じました。

広島、長崎に落とされた原爆に今なお苦しめられている人たち、ふるさとを奪われて今なお戻れない人たち。戦争という国家間による暴力行為は未だに国民に痛みを残し続けています。このようなことが二度と起こらないように、私たちは後世にこれを伝えていかなければなりません。

これから皆さんが、戦争や原爆についてお子さんやお孫さんに語り継ぐ時、この北方領土問題についても一言申し添えて下さい。それだけで今日、私が皆さんの前でお話させていただいた意味があったかなと思います。

皆さんこんにちは。日頃から北方領土返還運動に県民の皆様方には大変お世話になっております。ありがとうございます。この開幕の最初にですね、北方四島の唄での踊り、初めて見まして非常に感激し、大変心強く感じました。改めてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

私は今紹介がありましたように、1934年、昭和9年の2月に色丹島で生まれました。現在は、81歳と8カ月ですね。81.8歳になります。今、元島民の平均年齢は80歳を越えておりますので、大体私の年代が平均年齢になったと、ご理解いただければわかりやすいと思います。

私は幸いにして、まだこの様に皆さん方の前で元島民としての語り部を出来るということを大変私自身も嬉しく思うし、これからもますます、この北方領土問題を日本全国の皆さん方の手で取り返すために、限りなく返還運動の先頭に立って私はまだまだ頑張ろうと思っております。

今日は北方四島の歴史とかではなく、昭和20年8月15日に戦争が終わった。しかも、日本が負けて戦争が終わった。その後の北方領土はどうだったんだということ。私は、ソ連が不法に北方四島に攻めてきた時の話しを、重点的にさせてもらいます。日本全国の皆さん方に、北方四島はどうだったんだということ覚えてもらいたいと思って話しをします。

この北方四島は、今二世の方もお話ししましたが、四島それぞれ特徴があって、非常に美しい島です。ほとんどの島は、大変海産物や魚漁資源に恵まれていて、ほとんどの人が魚によって生計を立てておりました。地形的にも美しい。そして、それぞれの地域で本当に兄弟の様な、親戚の様な付き合いで長いこと暮らしていたわけです。

私の出身の色丹島は、鹿児島県の徳之島とやや同じ大きさなんです。決して大きな島ではありませんけれども、高山植物や天然の良湾に恵まれた大変美しい島、これが色丹島という島です。この島はですね、戦前北海道立公園に、指定されるという所までいったんですけども、残念ながら第二次世界大戦のために、これが頓挫したという島なんです。

私の祖父は明治元年生まれですから、今から150年近く前も前の話ですけども、富山県黒部市出身でして、そこから色丹島に25歳の時に渡ったという話しを聞いております。その祖父を中心に、大変厳しい自然の中北方四島を開拓した。これに父も力を合わせながら一家揃って、漁業を開拓したと私は聞いております。

大変素晴らしい島での生活の中で、残念ながら昭和20年8月15日に戦争が終わって、その2週間後の9月1日に色丹島に600名のソ連軍が一挙に上陸してきました。不法に侵攻してきたわけですから、全く島民の誰一人も予期をしていなかったと。この北方四島のソ連軍の侵攻は、8月28日に択捉島から始まって国後島、色丹島、歯舞群島を、9月4日までに全部ソ連軍に不法に占拠されたとなっております。

私は色丹島ですので、色丹島の話しが主になりますけれども、色丹島の斜古丹にある斜古丹湾はちょうど地図で見ますと、国後島と相対する面の方に斜古丹湾という湾があって、部落民が当時は200人程度住んでいました。戸数は60戸の家があったんですけども、私は当時小学校5年生11歳でした。弟と2人で学校に行く時に、見知らぬ大きな船が入ってきたんですね。その時、アメリカ軍が来るんだという話しが島ではもっぱらの話しでした。ソ連軍が来るとは聞いてなかったんですね。ところが、入ってきた船は大きなソ連の輸送船など2隻でした。私と弟の通う学校



は家から3.5kmぐらいあって一番遠いところなんです、その途中でその情景を見て急いで学校に行ったんですね。当時学校には、1年生から6年生まで約30~40人くらい居たと記憶しています。もう学校の中も大騒ぎになっております。そして「ロスケがきた」という、普段はロスケという言葉は使わないんですけども、「ロスケがきた！大変だ！」ということになって、学校の中はもちろん大騒動。それから部落の人達も大騒動になっていたんですね。

その斜古丹の部落民200人の所に、600名の兵隊が完全武装して斜古丹湾に上陸したんです。もちろん学校にですね、私達の授業中に土足のまま6~7名の兵隊が完全武装して入ってきたんです。もう私達は、当然子供心にも殺されるなど、覚悟をしなきゃならないような緊迫した状況の中でことが進んだんです。ちょうどその時、算数の時間だったんです。当時女の先生が算数の問題を出してたんですね。それを生徒に当てたんですけども、生徒は恐怖のあまり、その答えを間違ったんです。ところが、その教室に不法に入ってきたその中の将校が、一人だけ恰幅のいい明らかにこれは上級だな、偉いと思う人が一人居まして、その人が一人黒板の前に出てきて、子供からチョークを取って答えを書き直した。それがですね、正しい答えだったんです。それで子供達は、ロスケも日本も算術は同じなんだと、当然のことなんですけども。その行為があって、教室の中はその恐怖からちょっと変わったんですね。女の先生は、非常に気丈にですね、ロスケの兵隊に対して体を張って子ども達を守る、そういう行動に見えたんです。その間に部落には600の兵隊が村役場や警察や色々な施設を含め、普通の60戸の民家にもいっぺんに入ったんですね。当初はアメリカが来ると、アメリカの赤鬼がくるからもう大変だと。だから若い女性は、絶対に若い女性という姿をしてはダメだという空気が流れた。ところが、ソ連が来たものですから、尚一層混乱してですね、大変な混乱になったんですね。当時私は小学校5年生ですから、どういふことになるのか判りませんでしたけど、あとから私の母親に大変だったと状況を聞いていましたが、一人の犠牲者も出ないで過ぎたんですね。この北方四島は色丹島だけでなくですね、色々なところでソ連との対決があったんですけども、抵抗は一切出来ませんでした。色丹島には暁部隊という部隊があって日本の兵隊が居たんですけども、兵隊に一気に制圧されて完全に武装を解除されて、全く無抵抗で降伏したと。その兵隊さん方は、それから10日後に全員シベリアに送られたと。それはシベリアから、6年も7年も生き延びて帰ってきた茨城県の兵隊さんが、後に色丹島に居た時と、シベリアに居た時の手記を本にしたんです。それを私が読んで、色丹島の日本の兵隊さん方がシベリアに居たと判りました。

ソ連兵が来てから、2人か3人集まって話ただけでもソ連から咎められたんです。もちろん学校では、卒業式も入学式も色々な記念式典、集会は一切ダメと。そういう厳しい監視の中で、元島民はとっても耐えられないと。いつ殺されるかわからないということで、漁業者が多いもんですから自分の持ち船で脱出したんですね。どんどん根室近辺、羅臼、標津、別海、国後、歯舞群島、色丹島から逃げたんです。脱出したんです。ただ、択捉島だけは、あそこからは誰一人脱出が出来なかった。というのは、あまりにも遠くて、そして択捉と国後の海峡が魔の海峡と言われていて、漁民でも怖れるような海峡があそこにあるもんですから、出来なかったんですね。そういうことで北方四島は、ソ連が攻めてきてからガラッと生活が変わって来ました。元の過ごしやすい生活が一つも無くなった。恐怖そのものです。やがて、ソ連の軍人の家族も来ました。民間人も入って来ました。すると、子ども達もたくさん来ます。日本人をはるかに越えるロスケが入ってきたんですね。当然子ども達に教育する場所も必要だからと言って、日本の学校を取るようなことにもなったんですけども、これは先生方がなんとか抵抗して免れたのですが、すぐ傍にロシアの学校が出来ました。その後の島民の生活というものは、もう口で表せられないような不

安と恐怖にかられて生活をしていました。脱出した人達も、全部が北海道に着いたかという、昼だとか波の良い時はソ連の監視が厳しくて、脱出すると必ず銃撃されてすごく犠牲者が出る。

そのため、夜か海の荒れた時しかないわけです。結局、銃弾からは危険にあわされないけど、自然の荒天時や時化の中に船を出すわけですから、すごい大きな犠牲を払う。それを覚悟で出すわけですから、たくさんの犠牲者が出たんです。

やがて3年経って、ロシア側から一方的に日本人を全部日本に戻すと、そう言われたのが昭和22年の秋でした。それはソ連の、1万トンクラスの船が、択捉、国後、色丹、歯舞群島の人達を乗せて日本に帰るといことなんですけど、結果的には樺太、今のサハリンの真岡に連れてかれたんですね。

そういう中にですね、9月の末から10月、11月、12月の3ヶ月間、1万人を超える北方四島元島民がこの樺太の真岡の小学校と女学校に収容されたんです。そこでの生活はね、口では言えないくらい酷いです。私は、樺太で3ヶ月暮らしました。13歳、学校1年生の時に私は日本に上陸したわけです。ちょうど多感な頃に、生き延びてきた。生き延びてきたと言っても過言でないくらい、多くの人が死んだんです。本当によく死にました、樺太では。寒さと飢えと病気です。病気と寒さにつかまったら終わりなんです。薬もなければ医者も居ない。隣のお婆ちゃんが死んでも隣の小さい子どもが死んでも、俺だけは絶対死なないぞ！とみんなそう思っているんですけども、つかまるんです。そういう状況の中で、生きてきたから、あの時の苦勞を思ったら大概のことはやっていけると。こう思いながら生きてきました。

もうあれから70年経ってしまったんです。本当に早いです。この70年の間に私達元島民はですね、期待と失望…この連続なんです。今度は良いだろうな、今度は良いだろうというのが今まで何回もありました。今度は進むぞ！と、全部進むんじゃないかと少しでも進むぞ！と思う期待なんです。ところが一つも進まないで終わっちゃうんです。むしろ逆に今はですね、進んでるのではなくて、進んだものまでマイナスの方になっちゃってる。ですから、今私は平均年齢80歳の元島民1万7千人を超える人が居たんですよ。今は6千人位のとこまでいってしまったんです。あと、今残ってる元島民として一番若い年齢はですね、今70歳です。この人は当時1歳ですから、島の事はわからない。大体当時の事を覚えているのは、7、8歳位の人です。

当時血気盛んな人方で詳しくわかってる人は、今生きていても残念ながらね、わかんないって人が多いですね。それは当然、当たり前です。本当に覚えてないというのが本当で、今ちょうど私達が当時ですね、鼻歌しながら学校に通っていたあのガキ大将がですね、今この世にですね、最後の語り部としてですね、全国の皆様方に。

先ほど二世の方も話してましたけども、この大事な北方四島というのは、本当に日本の国土なんです。未だかつて一度も、他の国になったことのない純然たる日本の領土なんです。私達元島民は、そこに生まれたんです。私の場合は、祖父、父、私と三代に渡ってですね、北方四島色丹島に世話になったけれども、残念ながらこの財を築いた祖父は、昭和21年の秋に、全ての財産をロシアに取られて、すごく悔しい思いをして78歳で色丹島の地に戻っちゃったんです。

私はお墓参りやビザなし交流や自由訪問という、訪問を1年に必ず1回はさせてもらえる機会があるんです。その度にですね、私はその祖父に言うんです。「まだだ、まだだ…本当はいつでもここに来たいんだけど、今年もようやく来た。これはまだ続く。」と、こういう様な報告しか出来ないのがね、非常に残念なんです。

私は先ほどお話ししました様に、ロシアの学校が出来ました。日本の学校もありました。その中で、大人達は日本の大人とロシアの大人はすごく反骨しました。でも子ども達は学校に通うという道はどうしても一緒になって歩かなくてはならない。そういう環境なものですから、反骨をしても知らないうちに、その子ども達と遊ぶようになった。そしてお互いの立場を理解しながらですね、友好とか共生とか友情とか愛情とか、人間毛が違ってもしっかり、わかりあえるものはわかりあえると。それが子ども達の心の中に芽生えてずっとあるんですね。

元島民は、本当にもう期待と失望の連続ですけども、どんな仕打ちをされても諦めない。こういう思いで、この運動を全国の皆さん方に伝えていく。これはもう我々の宿命的なものとしてですね。これは北方四島元島民だけのものではないんだと。先ほど二世の宮脇さんも話しましたが、これは今お聴きになってる皆さん方の、日本の領土なんです。そのことだけは帰ったら、友人知人に一人でも多くの方に伝えて頂ければ大変ありがたいし、本当に皆さん方一人一人の力を私は借りたいと。私は来年の2月で82歳になりますけども、もう少し頑張れるなと思っております。今日は、本当に多くの皆さん方に、話しを聴いて頂いて、心から感謝を申し上げます。今日は大変ありがとうございました。

志発島元島民二世 宮 脇 田鶴子 さん

ただいま紹介いただきました、根室管内中標津町に住んでいます宮脇田鶴子と申します。まだ語り部として経験不足で、お聞き苦しいところがあると思いますがよろしくお願いたします。

佐賀は暑いですね。中標津は昨日朝、出掛けの時0℃でした。札幌、旭川は雪が積もったようです。私の所は雪が舞っていました。佐賀空港に着きましたら18℃ぐらいで暑さ対策はしないで来ましたので、汗を掻きっぱなしです。

はじめに簡単に北方領土の説明をします。北方領土は、四つの島から成っています。北から択捉島、国後島、色丹島、そして歯舞群島です。歯舞群島は七つの島がありまして、その中で一番大きい島が志発島といい私の家族の出身島です。

終戦時、父・母・兄・姉が志発島に住んでいました。昭和4年、教師になった父は根室管内に赴任しました。そして昭和6年、国後島泊の国後尋常高等小学校に10年までおりました。その次に昭和12年から13年まで択捉島にいました。父は、島での暮らしで教職としてのやりがいと桃源郷のような生活で、島の虜になったようです。そして、母と結婚後昭和17年より志発島に着任し終戦までおりました。

島での生活で、冬の間遠くから通う子供たちのために寄宿舎を作りたいと言えば作らせてくれ、海岸を遠回りしてくる子供のために岬を突き抜けた道路を作って欲しいと言えば島の人が総出で作ってくれたり、教育のためにしたいということを見せてくれる島の人々に、島での教育を続けていきたいと思わせたようです。

8月16日ソ連軍が占守島に砲撃、南下してきました。9月3日には志発島に上陸し、島にいた日本軍は解除され国後島に連行されました。ソ連軍が来ることが伝わってきていたので、危害を加えられるかもしれないので避難をした方が良かったらと、婦女子を中心に根室に避難することで相談がまとまったそうです。

父は学校がありますので残りましたが、母と子供2人「これが最後の船だぞ」というのにミシンと共に乗せてもらいました。父は学校を守るために残りましたが、学校はソ連軍の宿舎となり授業どころではなくなりました。交通・通信の途絶えた島に教育局からの指示は来ない。どうしたら良いか。父は直接教育局に相談するため、根室に行くという船に乗り、帰って来るつもりで根室に来ました。市学に相談したところ、「もう島に給料を送ることは出来ない、指導方針も伝えることは出来ない。このまま根室にいるも島に戻るも好きにしたら良い」と言われ、戻る気が失ってしまったのでしょう、戻らなかったそうです。父にしたら、島での教育を放棄した思いがあったのだと思います。後々、島の話をしている時に「島が帰ってきたら、もう一度行って教育をする」と言っていました。

昭和33年、元島民の島へ帰りたいという思いと、生活のために千島連盟が発足しました。昭和58年、千島連盟中標津支部が設立されました。その設立総会の時には父も亡くなっていたのですが、父の代わりに私が行かなければと思い、出席したのが私のこの活動に関わりだした原点になってしまいました。

中標津支部では、返還要求運動はしていますが、活動は署名活動しかしていません。夏と冬まわりの年2回、街の中で署名活動をしています。元島民が中心で行っていましたが、高齢になり出る人が少なくなり後継者の私達に手伝いが回ってきました。

その署名活動時「島なんて帰って来ないよ。あんた方の利益のために何で署名しなければならないの」などと言われ、返す言葉がありませんでした。私の家は転勤族ですから、島に財産があるわけではありません。ただ、父の島に帰りたいという言葉だけです。当時私自身が、返還運動がどういう経過を辿って行われるようになったか勉強不足でした。今でしたらそんなことないですよ、と言えるのですが。

北方領土返還は、元島民だけが唱えていけば良いと思っている人が、北方四島の目と鼻の先のこの土地に住んでいる人の中にいるということが衝撃でした。返還運動をやっている人を奇異な活動家のように思っていることが、なんということだとがっかりしてしまいました。

平成16年、元島民の高齢化と共に元島民の人数が減っていく。元島民の想いを後継者が継いで行かなければ、どんどん北方領土の事を理解しない人が多くなる。この現状を変えていかなければと、北方領土隣接地域である根室管内1市4町の各支部の後継者で各青年部を作り、さらに根室管内青年部連絡協議会を設立し、住民の皆様には北方領土返還について理解してもらうべく活動することにしました。

自分たちが、現状を勉強するためにセミナーを開催するのは当たり前ですが、キャラバン隊を組織し道内の市町村を回りました。現在、一応道内一回りしたということで、道内と東北を1年ごとに回ろうとこれまで青森、仙台を訪問し、今年は富山で表敬訪問と署名活動をしてきました。

また、大人だけでなく子供たちにも知ってもらうために、青少年洋上セミナーを開催し、船に乗り中間地点まで行き、北方領土の近さを知ってもらい、北方領土について勉強してもらうことをしています。

国であれば国境ということになるのですが、北方領土は占拠されていると捉えていますので、北海道と北方領土との中間点を定め、そこを越えると拿捕されます。

その他に私の所属している中標津支部青年部では、根室出身の落語家で後継者の方がおり、その方に来てもらって後継者の語り部とセットにした、北方領土寄席を行っていますし、夏祭りには北方四島ビンゴ大会を開催するなど、人を集め北方領土返還という言葉が特別なものでなく、皆の事のものなのだと思ってもらえるよう活動しています。

元島民の方々は、島の暮らしや思いを伝えることが出来ますが、後継者の私たちは聞いた話としてしか語る事が出来ません。でも、祖父母や親の島が帰ってきたら島に行きたい、たとえ住めなくても自由に墓参りしたいという切実な思いを肌で感じ、受け止めていくことを誰よりも負けずに伝えることは出来ます。

私たちはその思いを持って返還運動を続けていきます。これだけ最後に言わせてください。

国の領土返還交渉は遅々として進みません。期待を抱いては“またか”と絶望を味わうなど、挫折感を抱きながらも頑張らなければと活動しています。でも、北方領土は元島民だけの問題ではありません。国民全員の「領土問題」なのだという認識を持って下さい。そして、皆様には返還の声を大きくしていただき、一日も早く返還交渉が進むよう、国に訴える声を挙げていただきたくお願いいたします。ありがとうございました。